

博 多 45

—博多遺跡群第77次調査の概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第394集



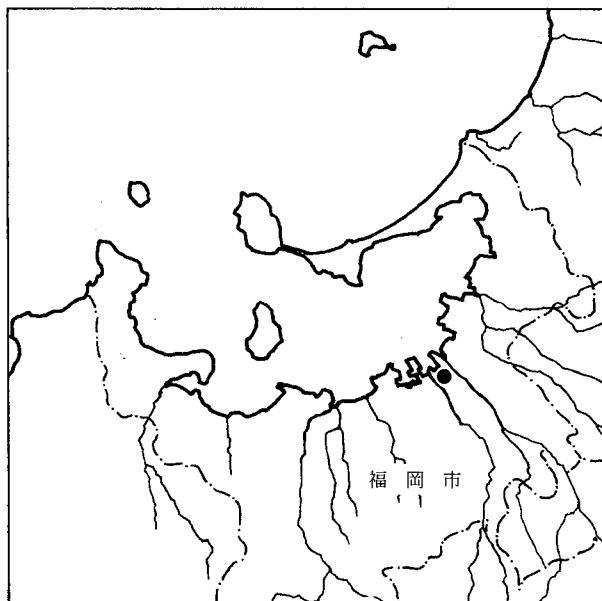
1995

福岡市教育委員会

博多 45

—博多遺跡群第77次調査の概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第394集



遺跡調査番号 9205
遺跡略号 HKT 77

1995

福岡市教育委員会

序

現在、福岡市はアジアの拠点都市をめざし、国際都市づくりを進めています。福岡市の都心部、JR 博多駅から博多港にかけての一帯の地下に眠る博多遺跡群は、国際都市「福岡」の原点ともいえる遺跡で、古代以来中世を通じて大陸・朝鮮を主とした東アジア各地との貿易で栄えた都市「博多」の地に当たります。

今回報告する博多遺跡群第77次調査地点は、博多浜砂丘の西端近くに当たり、古代末から中世初頭にかかる港の荷揚げ場が想定された第14次調査地点の東に隣接します。本調査で検出された古代末から中世初頭にかかる井戸や土坑などの遺構は、中世の港近くの賑わいを示すものとして、貴重な事例と言えます。

本書が、市民の皆様をはじめ、学術研究の場で活用されることを念願しております。また、調査から整理・報告までさまざまご協力をいただきましたフカヤ株式会社および西山建設株式会社をはじめとする多くの方々に、心から謝意を表します。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会
教 育 長 尾 花 剛

例 言 ・ 凡 例

1. 本書は、社屋ビル増築に先立ち福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、博多遺跡群第77次調査（博多区店屋町156番地）の概要報告書である。
2. 本書の編集・執筆は、大庭康時があたった。
3. 本書に使用した遺構実測図は、大庭および大庭智子が、遺物実測図は、大庭・森本朝子・上塘貴代子が作成した。整図には、大庭・井上涼子・萩尾朱美・佐藤信・樹屋育子があたった。
4. 本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。また、本文中で方位を述べるにあたっても、磁北を基準にしている。
5. 本書に使用した遺構写真および遺物写真は、大庭が撮影し、萩尾朱美が焼付けた。
6. 本書にかかわる遺物および記録類の整理には、生垣綾子・今井民代・上塘貴代子・萩尾朱美・古谷宏子・保利みや子・森寿恵があたった。
7. 本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

本文目次

第一章 はじめに.....	1
1. 発掘調査にいたるまで.....	1
2. 発掘調査の組織と構成.....	1
3. 遺構の立地と歴史的環境.....	2
第二章 発掘調査の記録.....	5
1. 発掘調査の経過.....	5
2. 調査地点の基本層序.....	6
3. 各遺構検出面の概要.....	7
第1面.....	7
第2面.....	8
第3面.....	10
4. 古代の遺構・遺物.....	12
379号遺構	12
433号遺構	12
470号遺構	12
476号遺構	13
482号遺構	13
486号遺構	15
493号遺構	15
697号遺構	16
774号遺構	16
その他の古代以前の遺物.....	17
5. 古代末～中世前半の遺構・遺物.....	20
281号遺構	20
349号遺構	20
355号遺構	22
356号遺構	22
395号遺構	22
405号遺構	23
490号遺構	24
615号遺構	28
616号遺構	29
667号遺構	29
670号遺構	30
671号遺構	30

673号遺構	31
674号遺構	31
764号遺構	32
765号遺構	33
767号遺構	34
6. 中世後半の遺構・遺物	35
155号遺構	35
165号遺構	36
181号遺構	37
523号遺構	37
529号遺構	38
7. 近世の遺構・遺物	40
023号遺構	40
071号遺構	41
8. 中・近世の遺物	43
第三章　まとめ	47

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

平成3年(1991)9月17日、フカヤ株式会社より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区店屋町156番に関する埋蔵文化財事前審査願が提出された。

申請地は、中世の国際貿易都市として栄えた博多遺跡群の範囲に含まれており、近隣でも第14次調査、第56次調査などの発掘調査が実施されており、遺構の存在は十分予想された。そこで、埋蔵文化財課では、試掘調査によって遺構の遺存状態、遺構検出面までの深さ等を確認する必要があると判断した。

試掘調査は、1991年10月3日、埋蔵文化財課事前審査担当の加藤良彦・宮井善朗の立会で、バックホーによる溝掘りで実施された。その結果、遺構は申請地全面に遺存していることが想定され、記録保存のための発掘調査が必要であるとの判断がなされた。

これを受けて、埋蔵文化財課ではフカヤ株式会社・株式会社サン設計室、西山建設株式会社との協議を繰り返し、最終的に1992年4月より発掘調査を実施することで合意した。発掘調査に関する契約期間は、4月6日より6月19日までとし、4月6日の発掘器材搬入をもって、発掘調査に着手した。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	フカヤ株式会社	代表取締役	船木卯平
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	井口雄哉
調査総括	同 埋蔵文化財課	課長	折尾 学
	同 第2係長	塙屋勝利	
調査庶務	同 第1係	吉田麻由美	
調査担当	同 第2係	大庭康時	
調査作業	岩隅史郎 江越初代 大庭智子 岡部泰朗 近藤澄江 権藤利雄 篠崎伝三郎 関加代子 関義種 芹野謙蔵 曾根崎昭子 津川真千代 寺園恵美子 寺田恒夫 村崎祐子 村田敬子 柳瀬亜紀 柳瀬伸 吉住シヅエ 萬スミヨ		

この他、発掘調査に関する諸条件の整備・調査中の便宜については、フカヤ株式会社および西山建設株式会社(工事部所長 岩下統陽氏)より御協力をいただいた。記して謝する次第である。

遺跡調査番号	9205		遺跡略号	HKT77	
調査地地番	博多区店屋町156		分布地図番号	天神49	
開発面積	531.92m ²	調査対象面積	350m ²	調査実施面積	350m ²
調査期間	1992年4月6日～6月19日				

3. 遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに現代まで続く複合遺跡である。地理的には、玄界灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川（那珂川）、東は江戸時代に開鑿された石堂川（御笠川）、南は石堂川開鑿以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（御笠川）によって画される。

この御笠川と那珂川にはさまれた地域は、弥生時代以後の主要な遺跡がならぶ地域でもある。上流側から著名なものをあげると、奴国を中心地であり、奴国王墓も発見された須玖岡本遺跡を中心とする一帯の遺跡群、朝鮮系無文土器が多量に出土した諸岡遺跡、日本最古の水田・環濠集落として知られる板付遺跡、弥生時代の青銅器鋳造地のひとつである那珂遺跡、弥生時代後期の環溝群や絹で巻いた銅剣が甕棺より出土した比恵遺跡など、ほぼ直線上にならんでいる。博多遺跡群で調査されている弥生時代中期・後期の集落・甕棺墓群は、これら諸遺跡の延長上で理解できるだろう。さらに、そのまま博多湾を渡ると、志賀島の「漢委奴国王」金印出土遺跡にあたる。弥生時代中期に、周辺に可耕地を持たない砂丘上に忽然と出現する博多遺跡群は、奴国の海上活動の拠点集落として位置づけられる。5世紀初めに築かれたとされる博多1号墳（前方後円墳、推定墳丘長56m以上）も、那珂川右岸に展開する一連の前方後円墳の首長墓の流れの中で考えられよう。6世紀後半には、那の津官家が設置される。その推定位置については、福岡市南区三宅が当てられてきたが、1984年比恵遺跡で柵列に囲まれた倉庫群が発見されるに及んでこれを官家にあてる説が浮上してきた。同様の、柵列に囲まれた倉庫群は、早良区有田・小田部遺跡群でも複数検出されており、その性格・実態についてはいまだ定まった評価をあたえられていないが、これらの地域が、有力な地位を保っていたことを示している。

律令時代にはいると、御笠川の最上流に大宰府がおかれて、九州の政治・軍事的中心地となる。博多湾岸には、博多遺跡群とは入り海ひとつを隔てた西の丘陵上に、対外交渉の拠点として鴻臚館がおかれた。博多遺跡群に官衙がおかれた記録はないが、石帶・銅製帶金具・墨書須恵器・須恵器硯・皇朝錢・鴻臚館式瓦・老司式瓦などが出土しており、律令官人の存在が推定できる。

平安時代後半になって律令体制が弛緩すると、対外貿易も京都の中央政府の直接的掌握から、大宰府を通じての管理へと変質する。これが、大宰府官人による蓄財のための私貿易の拡大をもたらしたであろうことは、想像に難くない。こうした流れの中で、11世紀には、博多に宋商人の居留が知られるようになる。博多遺跡群が本格的に繁栄・展開するのは11世紀後半になってからで、膨大な量の輸入陶磁器が出土している。

鎌倉時代、2度にわたる元寇で博多付近は戦場になるが、13世紀末には、鎮西探題が博多に設置され、博多は貿易の中心地というのみではなく、九州の政治的中心地という面も持つにいたる。遺構の上では、13世紀末から14世紀初めにかけて、あちこちに道路がつくられており、それらは戦国時代まで続いている。これらの道路は、必ずしも相互に規則性・統一性を持ってはいないが、中世後半を通じての博多の街区、景観はここにつくられたと言えよう。

南北朝時代頃から、博多の海岸部にあたる息浜の勃興・発展が著しく、博多の繁栄の中心は、内陸側の博多浜から、息浜へと移る。息浜商人らは、中国大陸の元・明のみならず、高麗・朝鮮、さらには琉球・東南アジアにまで進出して、貿易を行った。博多遺跡群からは、タイやベトナムの陶磁器が出土しており、これを裏付けている。また、この時代の民間貿易は、海賊である倭寇によって担われた一面もあるが、博多にも倭寇の存在が記されている。

一方、南北朝時代、足利尊氏によって博多に九州探題がおかれたが、九州では懷良親王をいただく南朝方や、反尊氏である足利直冬の勢力が強く、探題の政治力・軍事力は強大なものとはなりえなかった。その後、博多は筑前の少弌氏、豊後の太田氏、周防の大内氏らによる争奪の対象となった。室町時代後半の博多は、堺とならんで自治都市として著名だが、たびたび兵火にかかって焼亡している。1586年には中国の毛利氏の軍と対峙した薩摩の島津氏の軍によって焼かれ、灰塵に帰す。翌年、島津氏を逐って九州平定を遂げた豊臣秀吉は、博多の復興を指示した。これがいわゆる太閤町割であり、この時点では鎌倉時代以来続いた博多の諸道路、街区は廃される。太閱町割は、それまで町のあちこちで異なっていた道路の方向や街区を統一し、博多全体を長方形街区と短冊型地割りで仕切るものであった。こうして、中世都市博多は近世都市に生まれ変わった。

太閱町割と豊臣秀吉の朝鮮出兵によって、博多は再びよみがえる。しかし、江戸時代にはいり、鎖国政策がとられるに及んで、貿易都市としての博多は幕をおろした。そして、黒田氏52万石の城下町福岡と対をなす商人町博多として福岡藩の藩都となり、そのまま明治維新を迎えたのである。

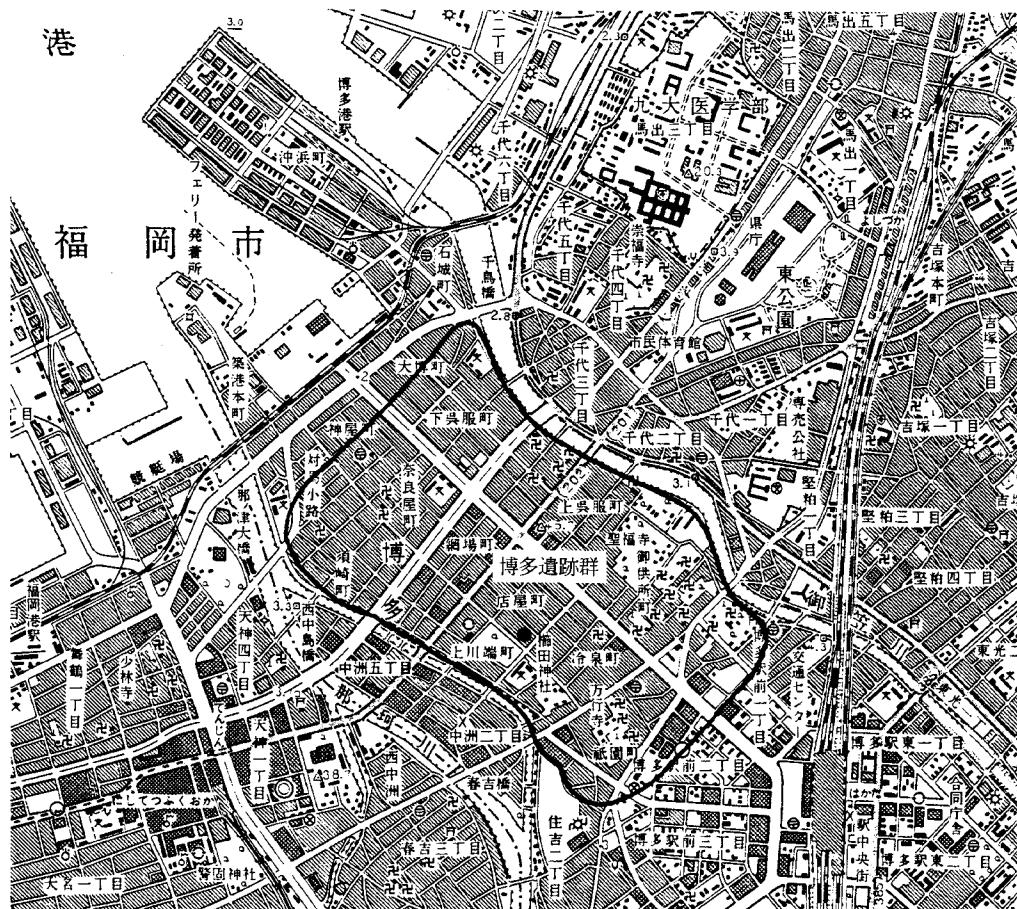


Fig. 1 博多遺跡群位置図(1/25,000)

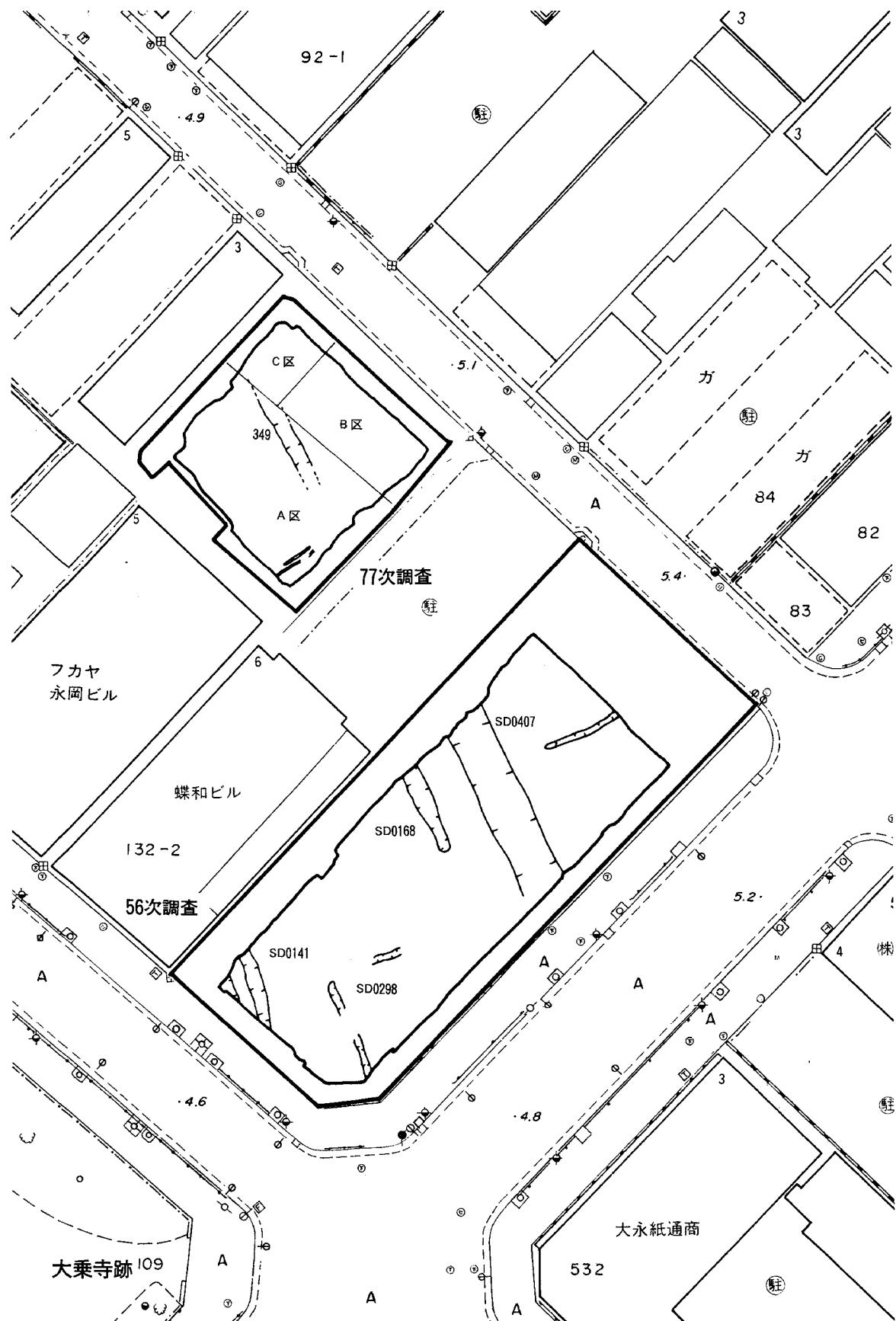


Fig. 2 調査地点位置図(1/500)

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の経過

前述した如く、1992年4月6日、発掘調査器材の現場への搬入をもって、博多遺跡群第77次調査に着手した。

これに先立って、現地表からマイナス80cmまでは、西山建設の手によって、すき取りを実施していただいた。これは、試掘調査時、表土層中にレンガの地下構造物が多く認められたことによる。したがって、今回の調査においては、表土下80cmまでは攪乱層として、一率に廃棄したことになる。

発掘調査に際しては、申請地がフカヤ株式会社の社屋の背面であり、荷物の搬入・搬出口として使用されており、調査中も調査区横を通って搬入出を続けるということから、運送用のトラックの出入り時間をさけて重機を使用、残土搬出を行わざるを得なかった。そのため、調査区を小刻みに分割し、道路に対して奥まった南西側約½をA区としてまず調査、この分の残土は道路側の未掘部分にためて搬出、A区終了後、道路側½を道路に直交する方向でさらに2分割し、南側をB区、北側をC区として、B区の残土をA区に埋め戻す形で調査、B区終了後C区の残土をB区に埋め戻してC区を調査するという煩雑な手順をふんだ。これは、搬出する残土を減らすことにより、上の制約による非効率的な残土搬出に要する時間をへらす目的と、常に重機の通り道を確保し、すみやかに出し入れできる様にするためである。

調査は、後述する如く、A区で4面、B・C区で2面の遺構検出面を設定して行なった。調査作業の経過は次の通りである。

- 4月6日 発掘調査器材搬入
- 4月7日 バックホーによりトレンチ設定。遺構検出面設定のための鍵層を探す。なお、トレンチ内の観察では、地形に顕著な傾斜、起伏はみられず、各検出面はおおむね水平なものとして設定することとする。
- 4月7日～8日 バックホーにより、第1面まで掘り下げる。8日、残土搬出。
- 4月8日 A区第1面遺構検出。測量基準点設定。調査区の1角に、コンクリート基礎によるプラットホーム状の貼り出しが突出している部分があり、この部分については調査を断念せざるを得なかった。そこで、このコンクリート上に測量基準点を設置、以後の測量・実測はすべてこれを基準とすることとした。なお、基準軸は、調査区の一辺に平行する様に設定している。
- 4月9日 A区第1面遺構検出終了。ひきつづいて遺構精査にとりかかる。レベル移動。福岡市下水道局が、冷泉小学校内に設けている基準点からひいてくる。
- 4月13日 A区第1面、全景写真撮影。
- 4月15日・16日 A区、第2面までバックホーで掘り下げ。併行して残土搬出。
- 4月16日 A区第2面遺構検出。
- 4月17日 A区第2面遺構精査にとりかかる。
- 4月21日 A区第2面、全景写真撮影。夜半より天気がくずれるとの予報があり、あわてて遺構を掘り下げ、全体を清掃して撮影する。本日、埋蔵文化財課において定例の会議。
- 4月25日 A区第3面まで、バックホーにより掘り下げ。

- 4月26日 A区第3面まで掘り下げ。平行して、残土搬出。A区第3面、遺構検出。ひきつづいて、遺構精査にとりかかる。
- 5月12日 A区第3面全景撮影。人力掘削で、第4面に掘り下げる。A区第3面は、すでに砂丘砂上面を基盤としていたが、包含層と遺構の切り合いのため、最下部の遺構のプランがつかめなかった。そこで、砂丘砂を削りこむのを覚悟の上で、まじり気のない砂丘砂になるまで掘り下げ、これを第4面として遺構検出を行なった。
- 5月19日 A区第4面全景撮影
- 5月25日 バックホーで打って返し。B・C区につみあげた残土を、A区に戻す。
- 5月26日 B区第2面に掘り下げ。A区第1面では、近世の鉄工所による攪乱が多くみられたことから、B・C区では第1面を設定せず、第2面から調査を始めた。B区第2面遺構検出。ひきつづいて遺構精査にとりかかる。
- 5月28日 B区第2面全景撮影
- 5月30日 バックホーにより、B区第3面まで掘り下げ。B区第3面遺構検出。遺構精査着手。
- 6月3日 B区第3面全景撮影。調査期間を勘案して、あえて第4面を設定せず、第3面上で最下面の遺構検出まで行うことにする（C区も同様）。ひきつづき遺構精査。
- 6月8日 梅雨入り。
- 6月10日 バックホーにより、C区第2面まで掘り下げ。C区第2面遺構検出。遺構精査着手。
- 6月12日 C区第2面全景撮影。
- 6月15日 バックホーにより、C区第3面まで掘り下げ。C区第3面遺構検出。遺構精査。
- 6月17日 C区第3面全景撮影。
- 6月18日 調査作業終了。
- 6月19日 現場片付け。調査器材搬出。

2. 調査地点の基本層序

基盤は、博多湾岸に形成された砂丘であり、淡黄色砂である。これをおおって、整地層を含んだ生層が幾重にも堆積、現地表まで続く。詳細は、Fig. 3 に示す。

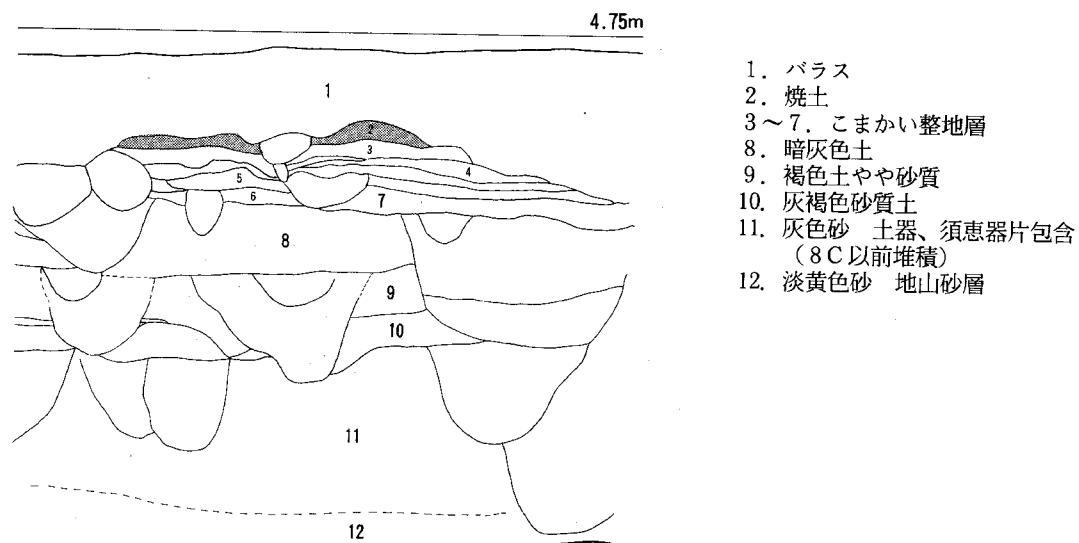


Fig. 3 土層実測図(1/30)

3. 各遺構検出面の概要

(1) 第1面 (Fig. 4 • 5)

標高4~4.25mで設定した遺構検出面である。

上位からの掘りこみ、汚染が多く、土色が汚れ、遺構検出は困難であった。上位からの掘りこみには、鉄滓・フイゴ羽口、炉壁などを多量に含むものが多かった。それらは、埋土中に木炭が多くまじり、土にしまりがなかった。近接する第56次調査同様、近世から戦前まで続いた磯野家、深見家などの鋳物工場にかかわるものと考えられる。



遺構としては、柱穴・土坑・井戸などを検出した。近世以降の瓦巻井戸、上述の鋳造関連土坑などを除けば、おおむね15～16世紀頃の遺構と考えられる。柱穴から建物址を複原することはできなかった。



Fig. 4 第1面全景(A区、南西より)

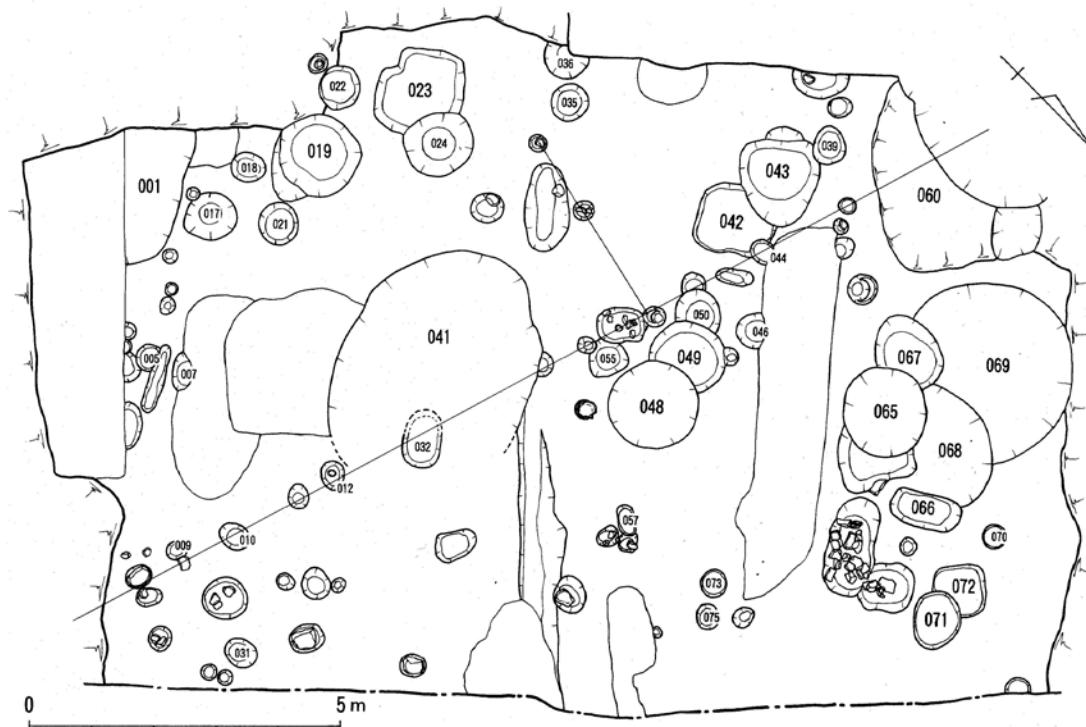


Fig. 5 第1面実測図(1/120)

(2) 第2面 (Fig. 6・7)

標高3.45～3.65mで設定した遺構検出面である。第1面からは、60cm程掘り下げている。

第2面では、柱穴・土坑・井戸・溝などを検出した。溝は、幅が狭く浅いものが2条、それも部分的に確認できたにすぎない。ただし、本来長く伸びた溝ではなかったようで、地表に記された区画のための標識という程度のものであったと考えられる。方位は、おおむね南北方向を指す。

柱穴の配置から、掘立柱建物跡が推定できるが、いずれも建物の全容までは知りえていない様である。しかし、建物の方向性を知ることは出来、おおむね北西—南東もしくは北東—南西方向を示している。これは、上述の溝状遺構の方向性と一致するもので、本調査地点においては、北西—南東・北東—南西方向の主軸が採られていたことを示している。

第2面の時期は、検出した遺構の年代観から、15世紀を中心とした時期と考えられる。

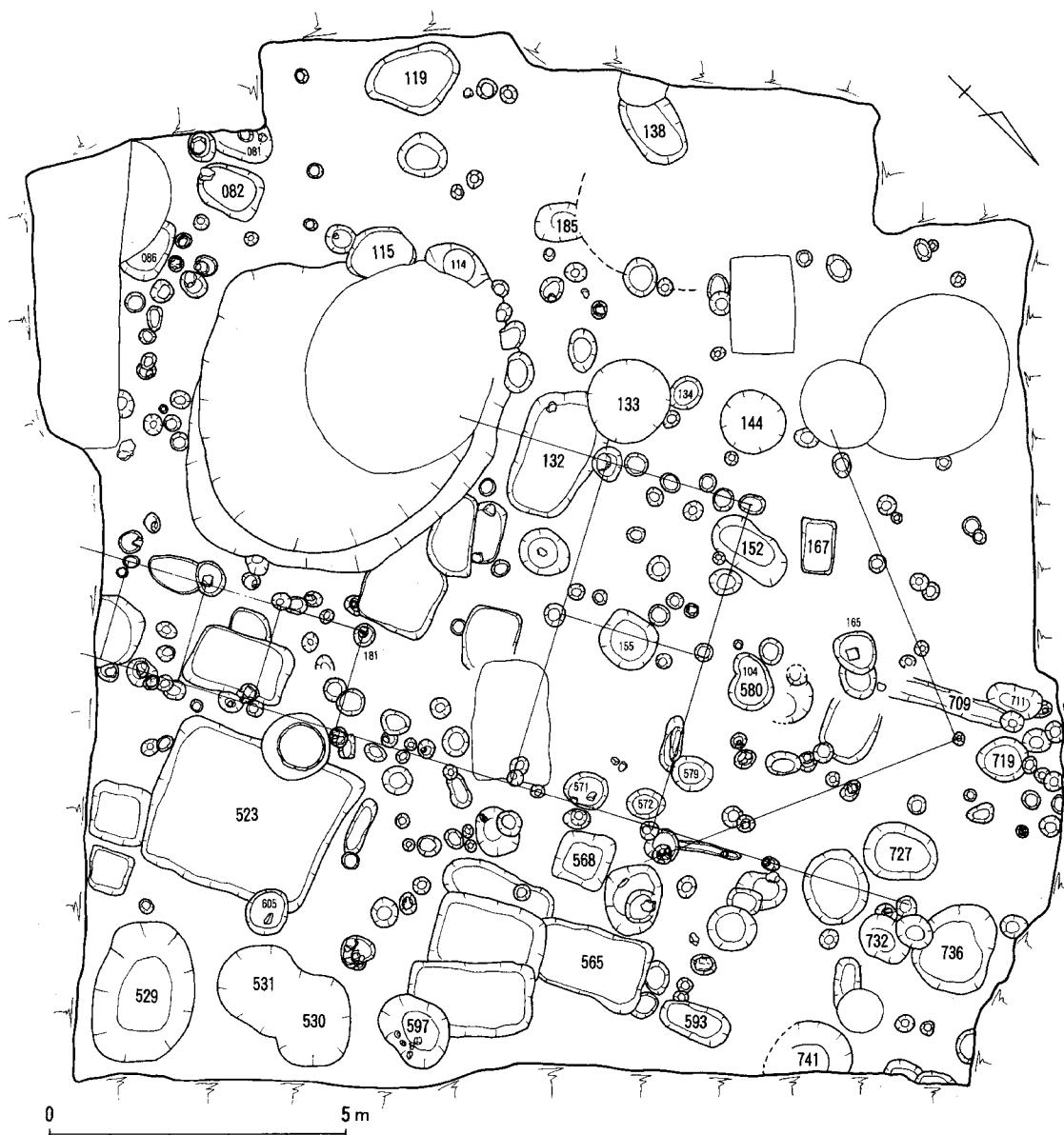


Fig. 6 第2面実測図(1/120)

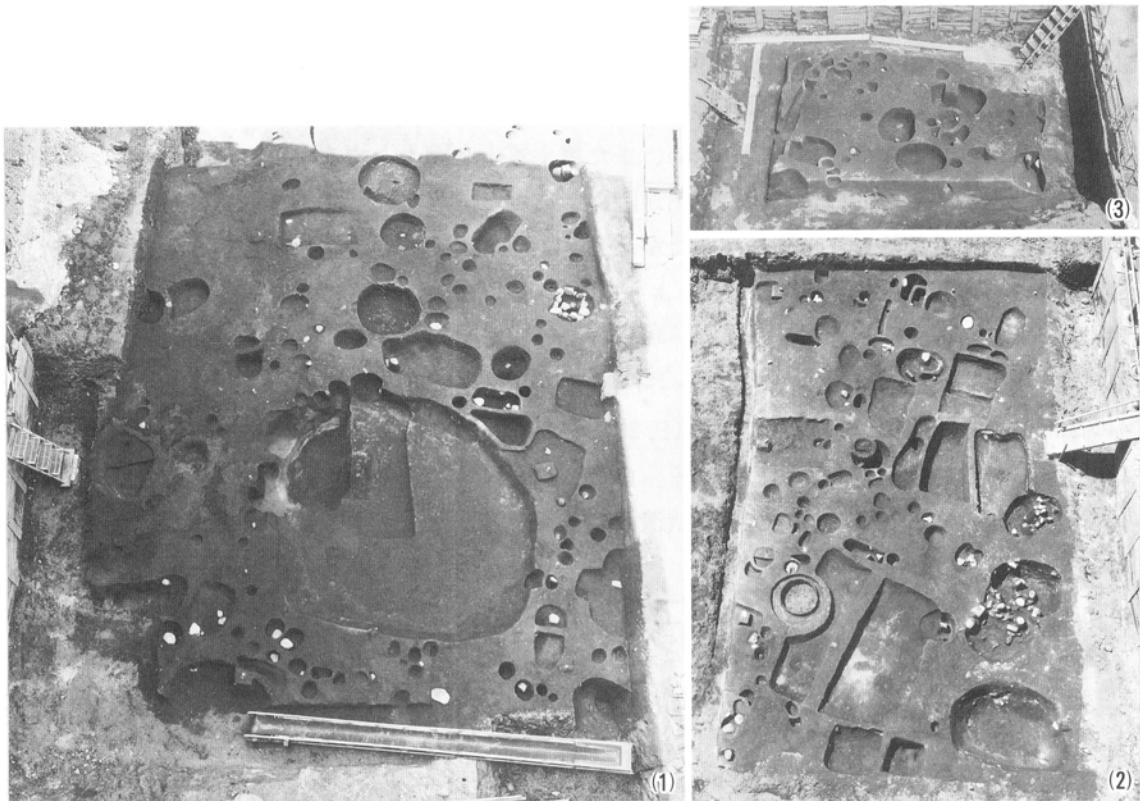


Fig. 7 第2面全景 (1)-A区(南西より) (2)-B区(南西より) (3)-C区(南西より)

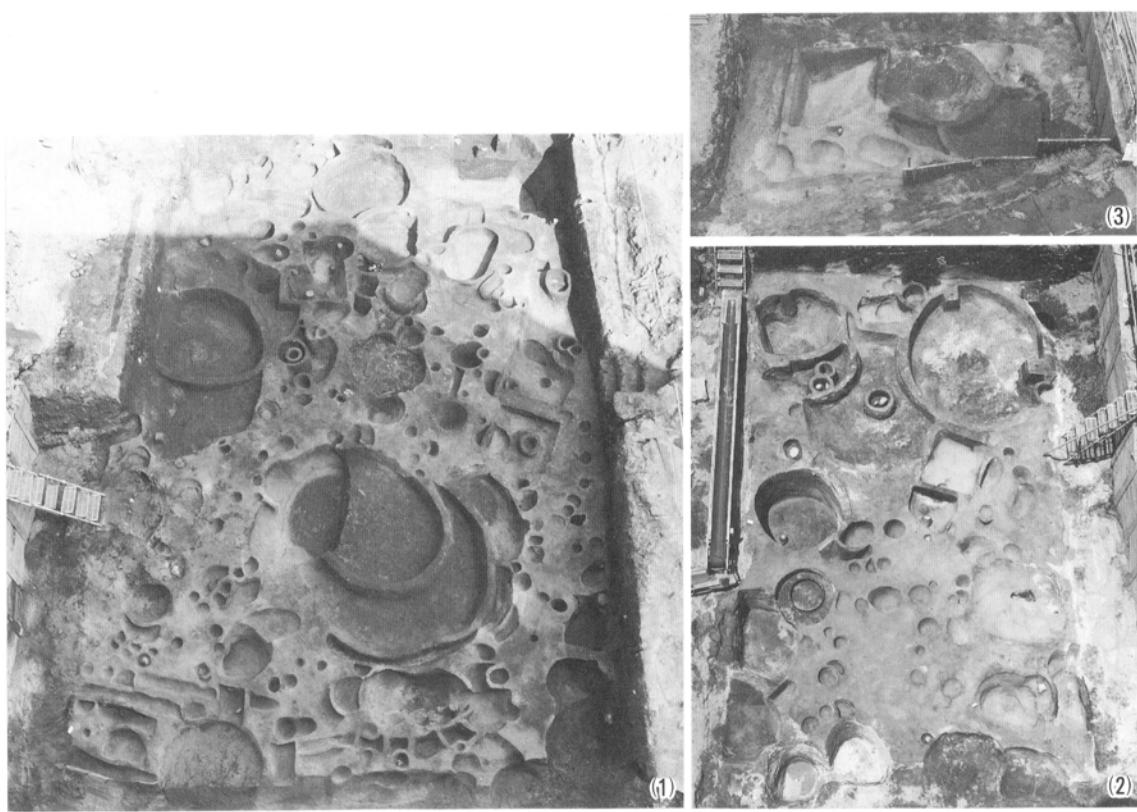


Fig. 8 第3面全景 (1)-A区(南西より) (2)-B区(南西より) (3)-C区(南西より)

(3) 第3面 (Fig. 8・9)

標高3.2～3.4mで設定した遺構検出面である。第2面からは、25cm程掘り下げている。

前節でも記した様に、第3面は砂丘砂層上面～直上にあたる。したがって、第2面以上からの掘り残しの遺構と第3面上での遺構が切り合い、また壤土質土を埋土とする中世の遺構のため、暗褐色～灰褐色砂を埋土とする古代の遺構は、検出が困難であった。したがって、A区では第4面を設定し、あえて砂丘砂上部を削除して遺構検出したが、B・C区では、期間的制約から第3面上で精査して遺構検出につとめ、第4面を設けなかった。よって、B・C区では、A区に対し第3面の遺構の種類・時期に幅が出来ている。

第3面で検出した遺構は、柱穴・土坑・井戸・溝・竪穴住居址などである。溝では、349号遺構が調査区のほぼ中央を南北につらぬいている(P. 20)。この他、調査区南西角付近に小規模な溝が数本交錯しながらもおおむね東西方向に認められる。また、調査区北西辺中央に大きく落ちこむ395号遺構は、その大きさと壁の立ち上りの緩さから溝状遺構の一部と考えた。とすると、大規模な濠状の溝の頭部

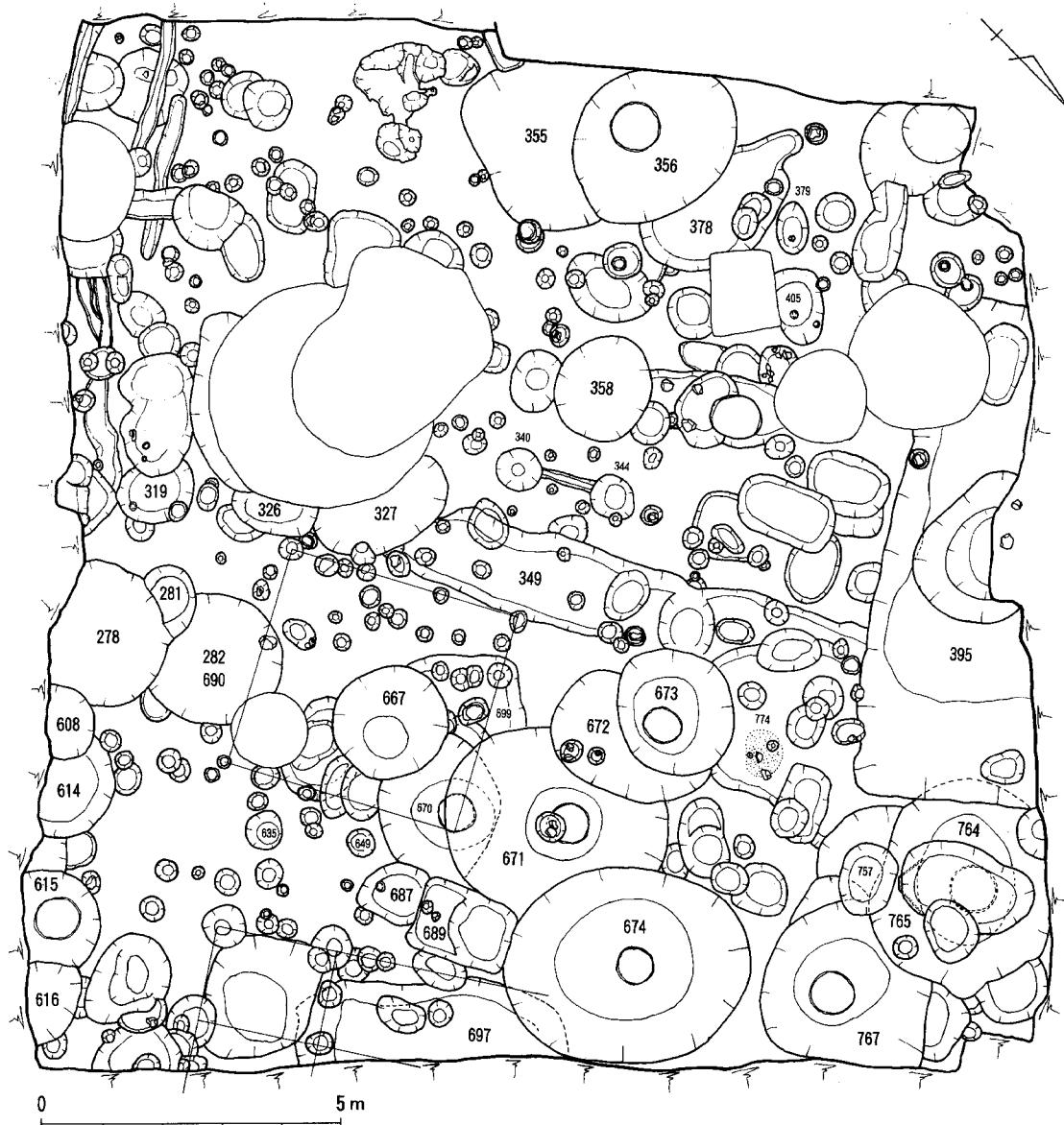


Fig. 9 第3面実測図(1/120)

と言うことになるのだが、調査区内ではその可否を確認できなかった（P. 22）。

柱穴から、若干の掘立柱建物跡を複原した。いずれも建物主軸を北西—南東もしくは北東—南西方に向けるものである。

第3面の時期は、8世紀から13世紀に及ぶ。

(4) 第4面 (Fig. 10・11)

標高3.0m前後に設定した遺構検出面である。「(3) 第3面」で述べた様に、B・C区では第4面を設定しなかった。

柱穴・土坑・井戸・竪穴住居跡を検出した。

竪穴住居跡は、かなり床面近くで検出したために、埋土の砂と地山の砂との違いが明瞭でない部分があり、プラン・深さ等やや不正確な部分があるものと考えられる。

第4面検出の遺構は、8世紀から11世紀におよぶ時期のものである。



Fig. 10 第4面全景(A区-南西より)

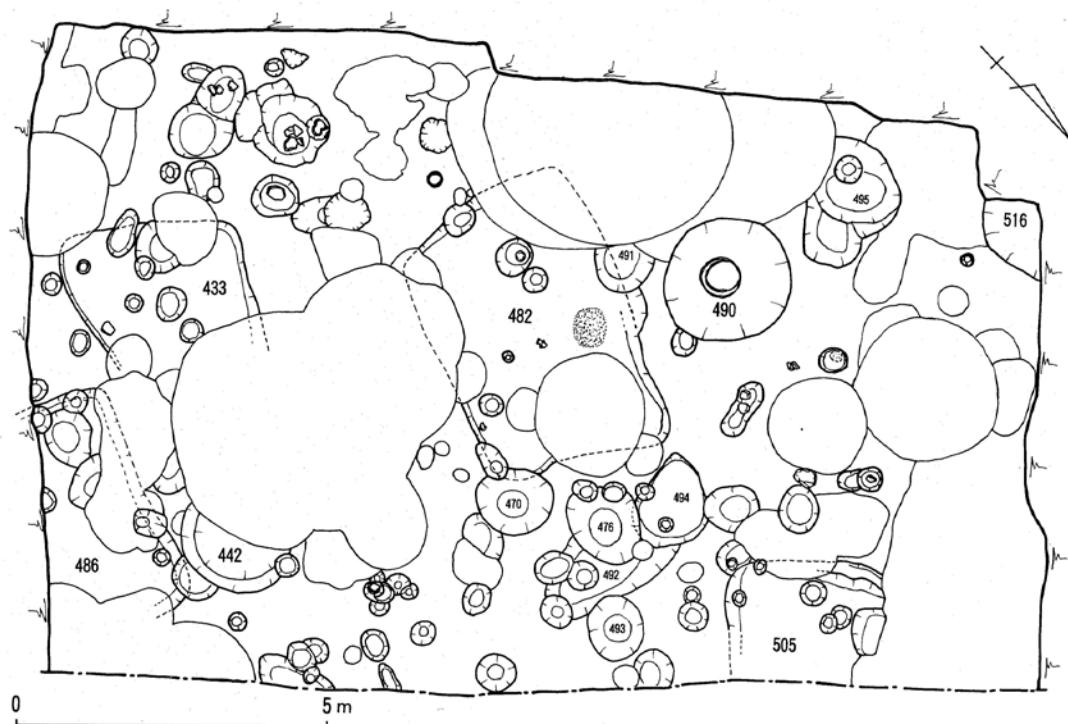


Fig. 11 第4面実測図 (1 / 120)

4. 古代の遺構・遺物

379号遺構 (Fig. 9・12)

A区第3面で検出した、柱穴である。長径36cm、短径23cm、深さ9cmをはかる。埋土中から、若干の土師器・須恵器片が出土した。

Fig. 12-1は、土師器の蓋である。内外面とも、密にヘラミガキする。胎土は比較的キメ細かく良好で、赤茶色を呈する。2は、須恵器の皿である。3は、土師器の盤であろう。脚部のみの破片で全形を知りえないが、脚の筒部分が大きくラッパ状に広がっており、程なく脚端となるであろうことが推測できる。筒部は、内外面とも横ナデ調整する。胎土はキメ細かく良好、黄白色を呈する。4は、土師器の甕である。口縁の内外面は横ナデ調整、体部内面は左上りのケズリ調整、外面は縦方向の刷毛目調整を施す。

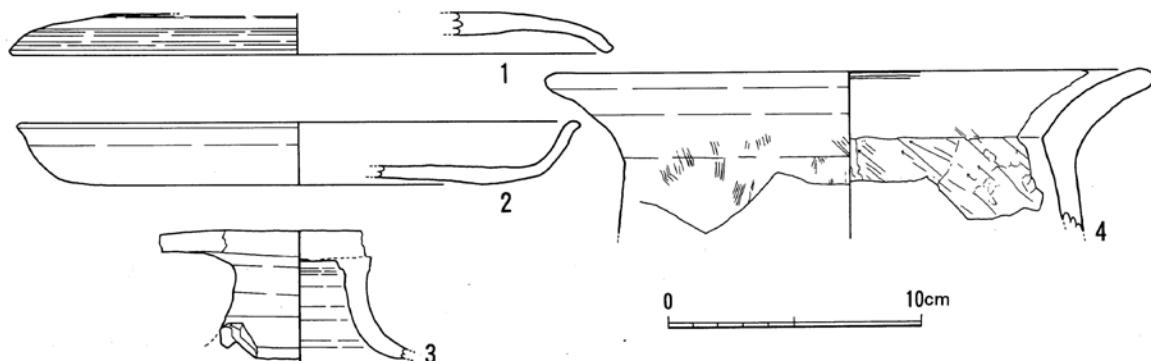


Fig. 12 379号遺構遺物実測図(1/3)

出土遺物の年代観からみて、9世紀代を考えるのが妥当であろう。

433号遺構 (Fig. 11・13)

A区第4面で検出した、竪穴住居址である。方形住居址であるが、南東辺付近で、埋土の砂が地山の砂と区別しにくく、いびつな形となっている。南西壁と北西壁は、旧状をとどめたものと考えられる。辺長が推定できる南西壁で、長さ2.9m、検出面からの深さは、25~30cmをはかる。主柱穴は、確認できなかった。

埋土中から、土師器・須恵器・鉄滓・焼塩壺などが出土した。9世紀初めごろと考えられる。



Fig. 13 433号遺構(北東より)

470号遺構 (Fig. 11・14・15)

A区第4面で検出した、楕円形土坑である。長径125cm、短径110cm、深さ63cm前後をはかる。後述する482号遺構（竪穴住居址、8世紀末、P. 13・14）の北東隅を切り込んで掘られていた。形状から、

柱穴の可能性も検討したが、桂痕跡が確認できなかったため、土坑として報告するものである。

埋土中から、土師器・須恵器・瓦（格子目叩き痕）の他、玄界灘式製塙土器片・焼塙壺片などが出土した。

Fig. 14-1は、須恵器の坏蓋である。つまみの部分を欠くが、つまみを貼り付けていた痕跡は残っている。端部は、小さく折り返して身受けとする。天井部は回転ヘラケズリ、他は横ナデ調整を行なう。**2**は、須恵器の坏である。おそらく、高台の付く器形になろう。**3**は、土師器の甕の胴部片である。いわゆる玄界灘式製塙土器で、内外面とも叩き痕跡が残る。なお、内面には、煤が付着している。

出土遺物から、9世紀初め頃の遺構と考えられる。

476号遺構 (Fig. 11・15)

A区第4面で検出した、楕円形土坑である。470号遺構同様、柱痕跡をさがしたが、みあたらなかった。長径140cm、短径110cm、深さ48cmをはかる。

埋土中から、土師器片、須恵器片が出土した。8世紀中頃に属するとみられる。

482号遺構 (Fig. 11・16~18)

A区第4面で検出した竪穴住居址である。長方形の平面プランをとり、長辺475cm、短辺300cmをはかる。床面は砂地のため、植物痕などの斑点状の汚染がみられ、確認が困難であった。そのため、若干掘りすぎてしまった。床面には竪痕跡が残っており、その検出レベルからみて、遺構検出面（第4面）から床面までの深さは、15~19

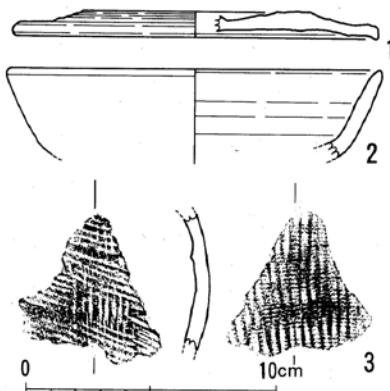


Fig. 14 470号遺構遺物実測図(1/3)

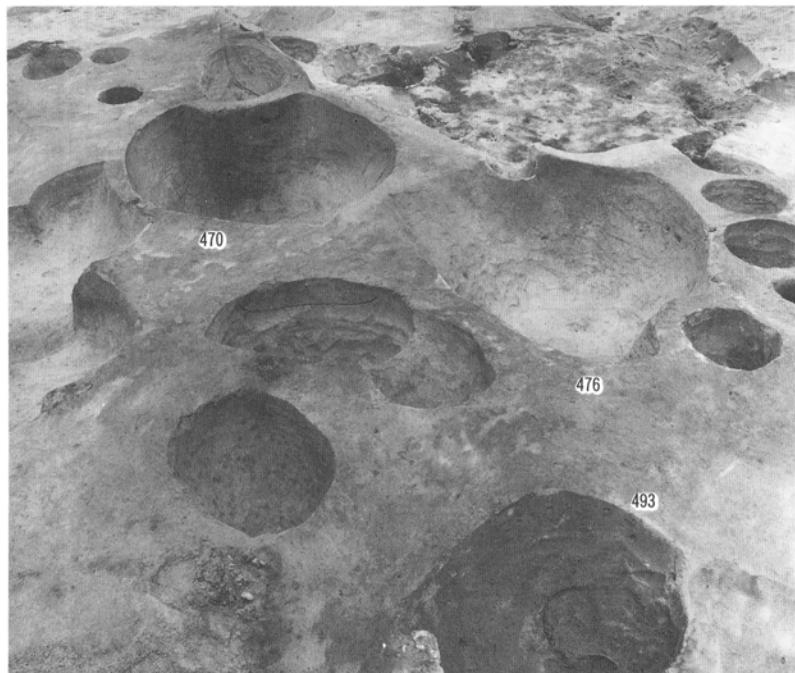


Fig. 15 470・476・493号遺構(北より)



Fig. 16 482号遺構(南西より)

cm程と考えられる。竈痕跡は、赤く焼けた砂として検出した。赤変した砂の範囲は、長径63cm、短径48cmで、外縁が特に赤く焼け、中程には炭粒が多く含まれていた。断面を切ると、深さ15cm前後の浅い皿状の凹みとなるが、特に土坑を掘ったものとは見られない。周囲に竈袖の粘土等は全くないが、火を焚いた痕跡は明らかなので、竈跡と考えた。住居址の壁からはやや離れており、移動式の土器製竈を据えたものと考えている。主柱穴は、見当らなかった。

Fig. 18に、出土遺物を示す。1～8・14は須恵器、9～13・15は土師器である。9の土師器杯蓋は、器形的には3の様な須恵器を模したものと言える。ただし、外面は丁寧にはヘラミガキを施している。内面は、横ナデ調整である。10・11は、口縁部が外方に屈曲し、口縁内面に沈線状の段をつけたものである。内面は、密にヘラミガキされている。手捏ねで、回転台を使用しておらず、畿内系土器と考えられる。16は、フイゴの羽口である。土師質だが、火熱で焼き締っている。棒に巻きつけて形を作った際の、紐状痕跡が認められる。一端には、鉱滓が黒色のガラス状に付着している。

8世紀後半～9世紀初めにおくことができようか。



Fig. 17 482号遺構竈痕跡(南西より)

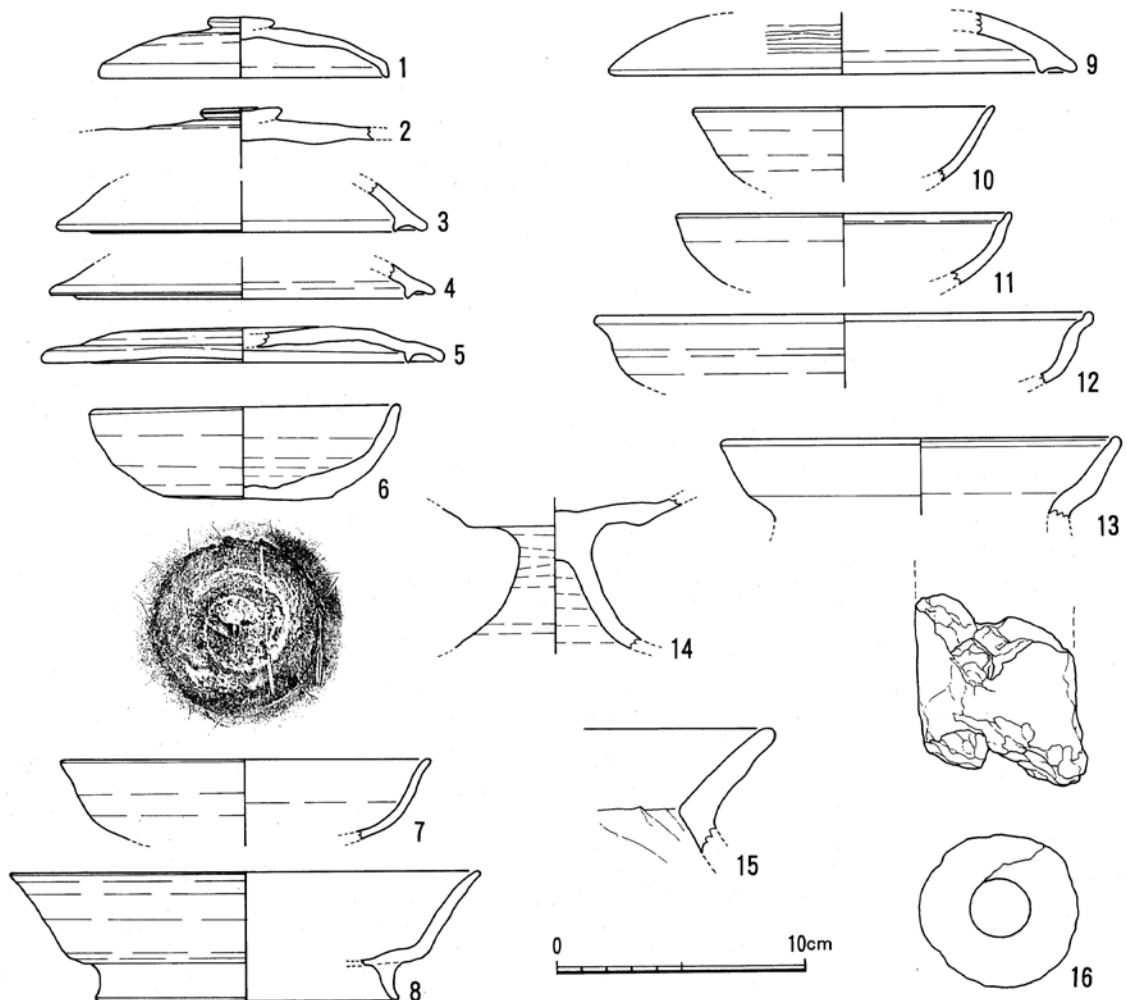


Fig. 18 482号遺構遺物実測図(1/3)

486号遺構 (Fig. 11・19・20)

A区第4面検出の竪穴住居址である。長方形プランを取るものだが、西半分を検出したにとどまる。確認できた西壁で辺長390cm、検出面からの深さは、20～34cmをはかる。

Fig. 20-1～3は須恵器、4・5は土師器である。1は、短頸壺の蓋であろう。2は、壺蓋である。4は壺で、丁寧に整形されている。頸部内面から体部外面までは横ナデ、体部内面はヘラ削りする。6～8は、土師質の焼塩壺である。8世紀後半代を考える。



Fig. 19 486号遺構(西より)

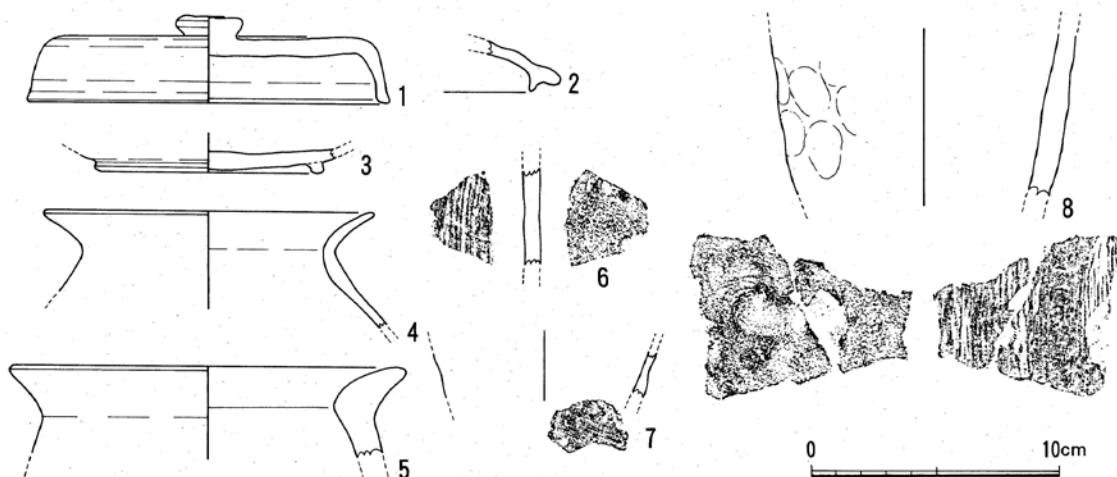


Fig. 20 486号遺構遺物実測図(1/3)

493号遺構 (Fig. 11・15・21)

A区第4面で検出した、楕円形土坑である。長径105cm、短径87cm、深さ64cmをはかる。埋土中から、須恵器片・土師器片・焼塩壺などが出土した。Fig. 21-1～4は須恵器、5・14・15は土師器、6～13は焼塩壺である。1は壺蓋である。口縁端部を小さく下方に折り返して、身受けとする。4は盤である。脚台部分以下を欠く。横ナデ調整によって、丁寧に整形されている。5は壺もしくは皿である。内外面ともに、横方向へのヘラミガキが施される。胎土は比較的良好で、赤茶色を呈している。6～13の焼塩壺には、内面に絹目の様な極めて細かい布目を残すもの(9・12・13)と、粗い布目がつくもの(6・7・8・10・11)とがある。6・7・8は口縁部を残しているが、いずれも内湾気味に作り、口縁端部は丸くおさめる。外面には、指頭痕もしくは掌痕がみられ、凸凹がはげしい。14は壺である。外面は指頭押圧の後刷毛目調整、内面は斜めに指削り痕が走る。15は、甌の把手である。本体に接いだところから剥げている。指押えで整形するが、上面はややくぼみ気味に作る。

おおむね9世紀初め頃の時期を考えることができるだろう。

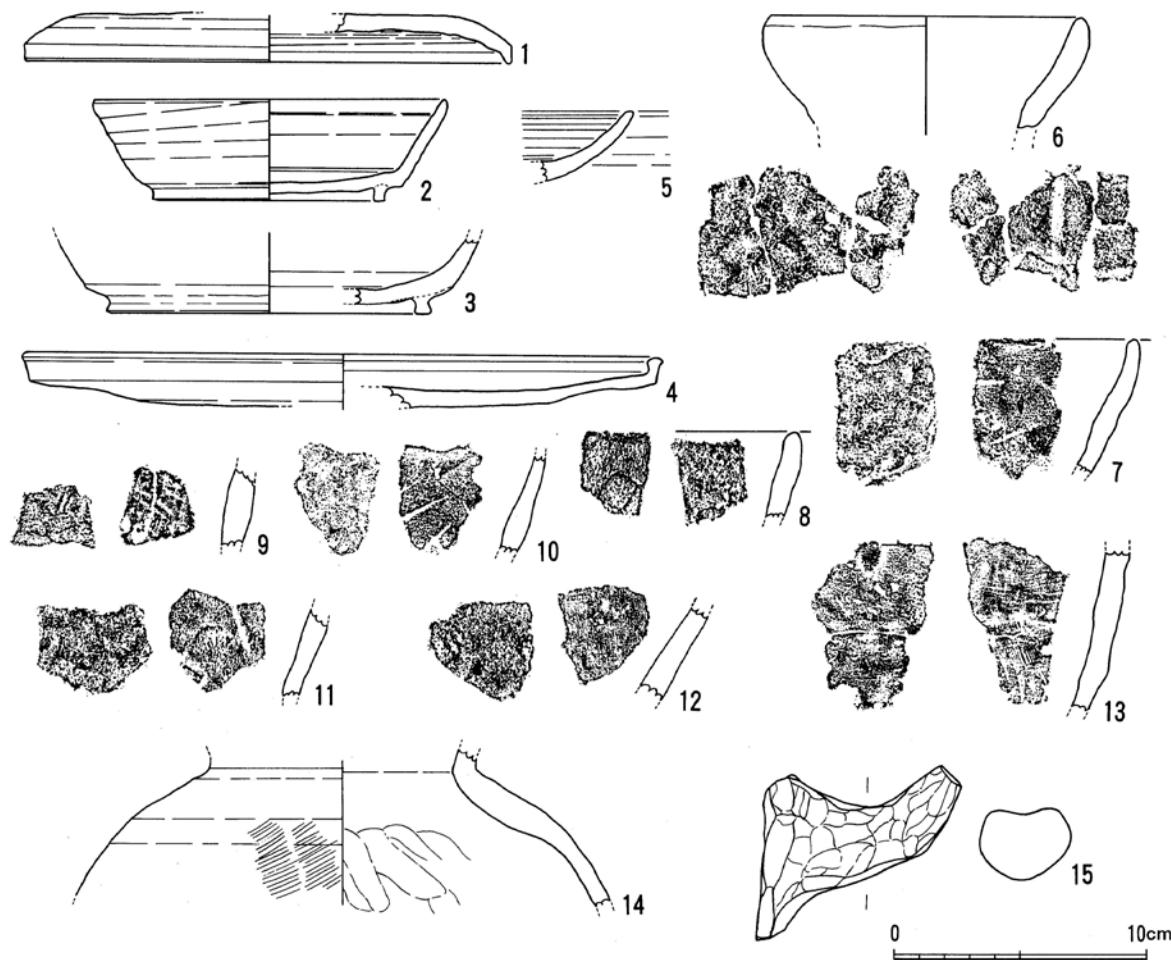


Fig. 21 493号遺構遺物実測図(1/3)

697号遺構 (Fig. 9・22)

B区第3面で検出した竪穴住居址である。長方形の平面プランをとると思われるが、南側の一部を検出しえたのみで、他は調査区外に出てしまっている。南西壁は、その北側が674号遺構（中世の井戸）に切られるが、674号遺構掘り方の壁に住居址断面が残っており、それからみて辺長330cm前後になるものと推定できる。床面までの深さは、50cm前後が残っていた。主柱穴などは、確認できなかった。

若干の須恵器小片・
土師器小片が出土した
のみで、時期比定は困
難である。

774号遺構

(Fig. 9・23・24)

第3面において、B
区とC区にまたがって
検出した竪穴住居址で
ある。ただし、平面形



Fig. 22 697号遺構(北東より)

は不整長方形であり、竪穴住居址と断定するのに、若干の疑問を覚える。しかし、床面から482号遺構と同様の焼けた砂が検出できており、竪跡と考えられること

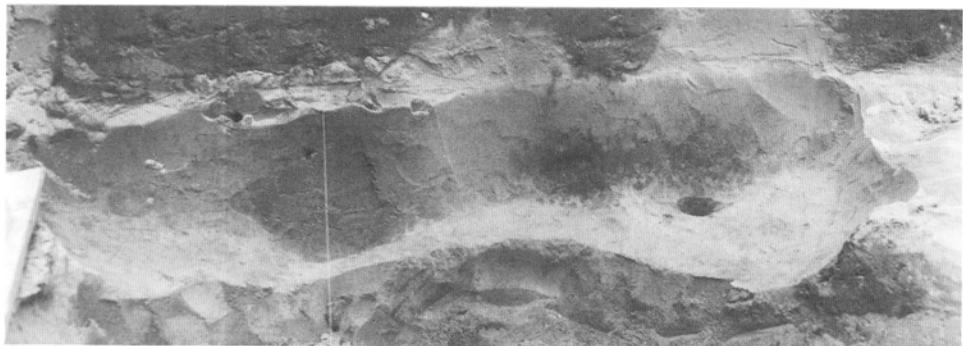


Fig. 23 774号遺構(B区調査時、南東より)

から、竪穴住居址として報告するものである。焼けた砂の範囲は、長径80cm、短径60cmの楕円形に及んでいる。砂の上面は暗褐色を呈するが、厚さ7cm程のその下面は明らかに焼けて赤変しており、火を焚いたことを示している。

須恵器片・土師器片・搗打石が出土した。Fig. 24に示したのは、全て須恵器である。1・2は蓋である。1は口縁部内側に小さなかえりを貼りつけて身受けにするのに対し、2では口縁端部をほぼ直角に下方に折りまげて身受けにするという相違がみられる。3～5は、高台付壺であるが、低平な高台を貼り付ける3と、ハの字状に開いた高い高台をつける5の二者がある。両者は、高台を貼りつける位置をみても明らかに異なっている。これらは時期差によるものと考えうるが、単一の遺構からの出土であり、遺構の継続幅を示すものとみたい。

おおむね8世紀後半代と考えられる。

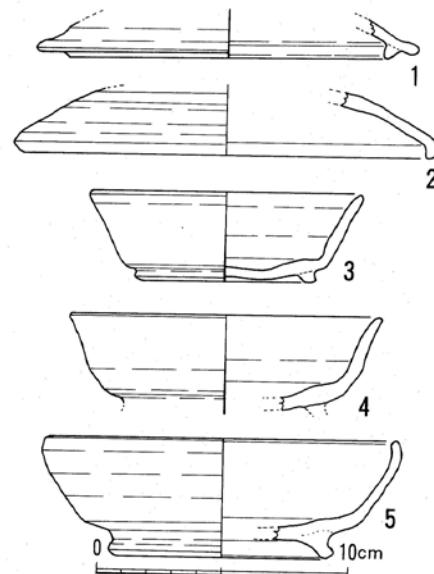


Fig. 24 774号遺構遺物実測図(1/3)

その他の古代以前の遺物 (Fig. 25・26)

上述した以外にも、包含層や中世の遺構から、古代以前の遺物は多数出土している。その中から、看過できないと思うものを抜き出し、Fig. 25～27に示す。

1は、黒曜石の剝片である。佐賀県腰岳産の石材である。A区第4面495号遺構出土。2は古式土師器の二重口縁壺である。横ナデ調整するが、全体に厚手で、鋭さに欠けた整形である。A区第4面出土。3は、畿内第V様式の甕であろう。口縁部は横ナデ、体部外面は若干左下りの平行叩き、内面は粗い横刷毛を施す。頸部内面には、ヘラ工具痕が認められる。淡い赤茶色を呈した胎土は、小砂粒を含むものの全体的にキメ細かく良好で、焼成も良い。在地産とは考えがたい土器片である。B区第3面672号遺構より出土。4は、須恵器の円面硯の脚部である。縦長の長方形透しの間の部分である。内外面とも横ナデ、脚端の接地部分は、ヘラケズリで面取りする。白色の小砂粒を含むもののキメの細い良好な胎土で、焼成も堅緻、暗灰色を呈する。B区第3面667号遺構出土。

5～16は、緑釉陶器である。5は、削り出し円盤高台の皿である。全面をヘラ磨きした上に、淡緑色をおびた白色の釉を施し、さらに口縁に濃緑色の釉を円形につける。胎土は、灰白色で微砂質だが、キメは整っている。生地は、瓦質がかった焼成不良気味の須恵質である。C区第2面下包含層より出土。6は、皿の口縁である。内外面をヘラ磨きした上に、淡緑色の透明釉を施すが、斑文状に淡黄緑

色をおびた部分も認められる。白色の微砂を含んだ灰色の胎土は、キメがやや細く、瓦質がかった須恵質に焼成されている。A区第2面下包含層および第3面出土。7は、浅塊である。内外面ともヘラ磨

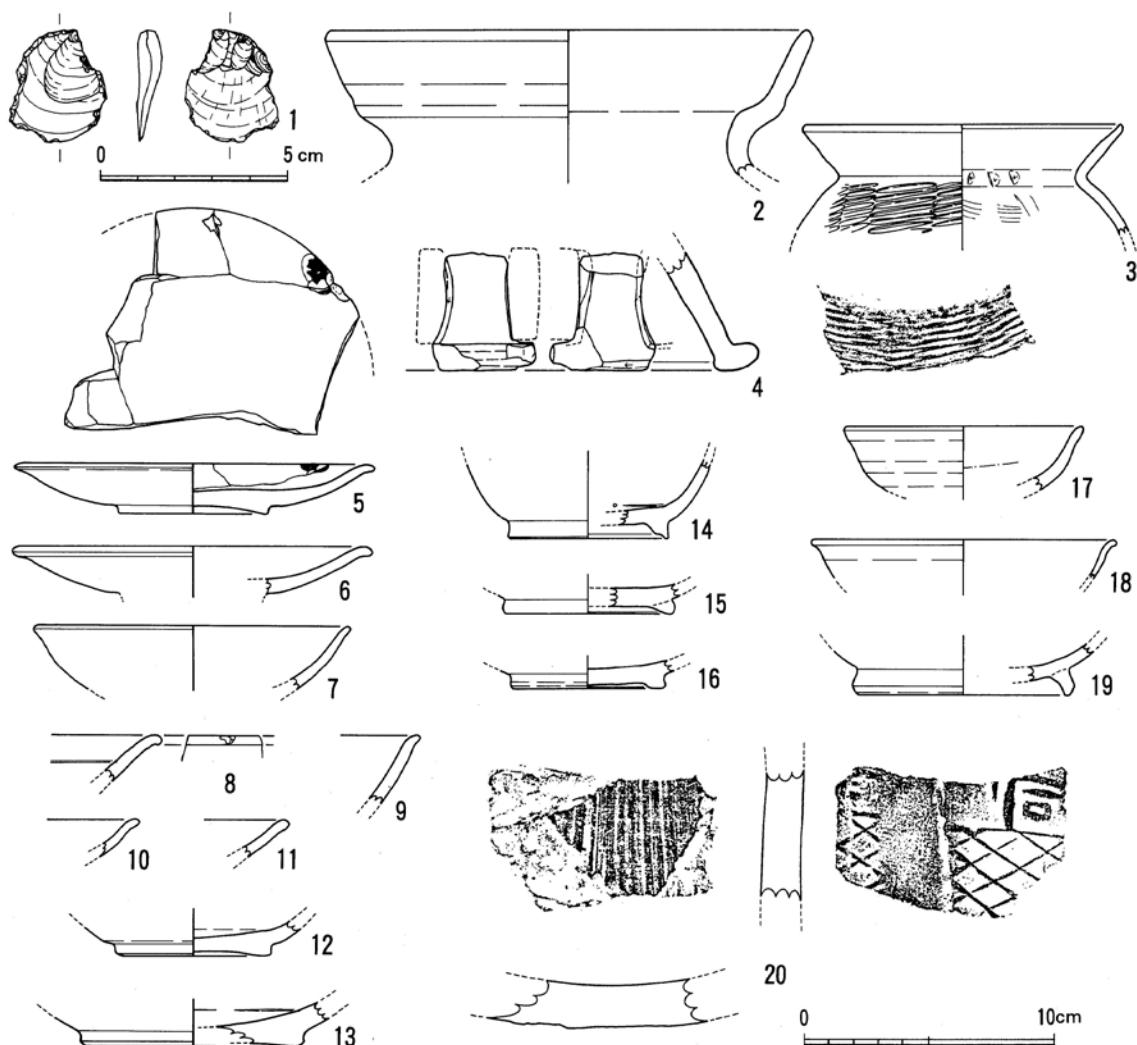


Fig. 25 古代以前の遺物実測図(1/3)

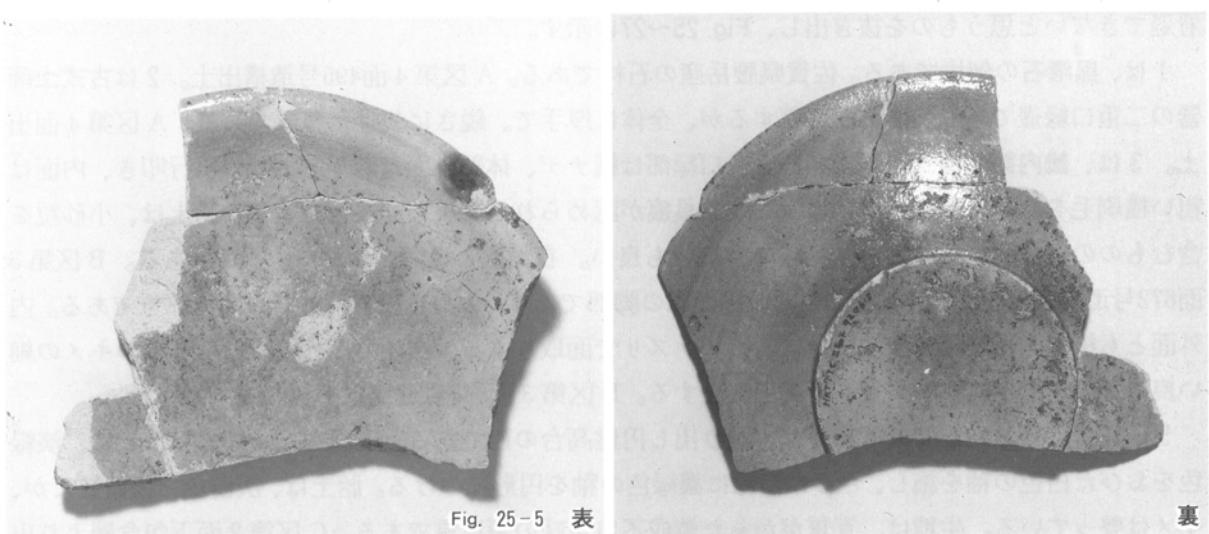


Fig. 25-5 表

裏

Fig. 26 古代以前の遺物 1

きし、銀化した深緑色の釉をうすく施す。胎土は須恵質で暗灰色を呈し緻密、焼成は堅緻である。A区第2面下包含層出土。8は、碗であろう。内面の口縁部下に、一条の沈線が巡る。また、口縁端部を工具先端で押えて凹ませ、輪花状にする。内外面ともヘラ磨きした上に、磨りゴマのある黄緑色の半透明釉を施す。土師質に焼成された淡褐色の胎土は、軟質となる。A区第3面378号遺構出土。9も碗であろう。横ナデの上にあらかじめヘラ磨きを加え、灰緑色の半透明釉をうすく施す。暗灰色で緻密な胎土は、須恵質で硬く焼成される。A区第2面出土。10は、皿であろう。内面はヘラ磨き、外面は横ナデし、淡緑色の釉をうすくかける。胎土は、淡褐色でキメ細かく精良だが、土師質の軟胎に焼成される。A区第3面340号遺構出土。11も皿である。横ナデしただけで、暗緑色の釉を施す。暗灰褐色の胎土は、キメはやや粗いが緻密で、須恵質硬胎に焼成される。A区第3面378号遺構出土。12・13は、削り出しの円盤高台である。内外面ともにヘラ磨きする。12は、灰茶色でキメがやや粗い、瓦質がかかった須恵質の胎に、淡灰緑色の釉をうすく施す。A区1面下包含層下土。13は、白色で緻密な土師質の胎に、淡緑色の釉をうすく施す。A区第3面342号遺構出土。14・15は、貼り付けの輪高台を持つ。14は、濃緑色でゴマ状の磨りむらのある不透明釉を施している。高台端部から外底部は、露胎となる。高台の畳付内面には、沈線状の段がみられる。高台内は、横ナデする。見込みには、径1~1.5mm程度の円形の目痕が残る。胎土は暗青灰色を呈し、緻密で精良。焼成も良好で、須恵質の硬胎となる。B区第3面690号遺構出土。15は、横ナデを行なっただけの胎土に、ゴマ状の磨りむらを持つ緑色半透明の釉を施す。高台畠付から外底部は、露胎である。畠付は、浅く凹む。暗茶色でキメの細かい精良な胎土だが、土師質の軟胎に焼成される。A区第3面356号遺構出土。16は、削り出しの輪高台である。見込みはヘラ磨き、高台周辺は横ナデ、外底中央付近はナデ調整する。全面に、深緑色の半透明釉を施す。胎土は、灰茶色で、白色の砂粒を含むが、緻密。焼成も良好で、須恵質の硬胎に焼きあがる。A区第3面下包含層出土。

17~19は、灰釉陶器である。17は、小碗である。灰色で緻密な胎に、うすい灰色のテリ状の釉が漬けがけされる。内外面とも横ナデする。A区第3面344号遺構出土。18は、碗である。灰色で緻密な胎土で、口唇を中心に灰緑色の釉がかかる。内面は、テリ状になる。横ナデ調整だが、極めて薄く整形されている。B区第2面571号遺構出土。19は、碗の底部である。「ハ」字状に高く踏ん張った高台が、貼り付けられる。内外面とも横ナデ調整。胎土は灰色で、キメはやや粗いが、緻密である。灰緑色の釉が、見込みに点々と散っている。A区第3面344号遺構出土。

20は、平瓦片である。上面は布目、下面には斜格子の叩き目と共に、「門司」の刻印が打れている。刻印は逆字で、「門」の一部と、「司」が認められる。B区第3面616号遺構出土。

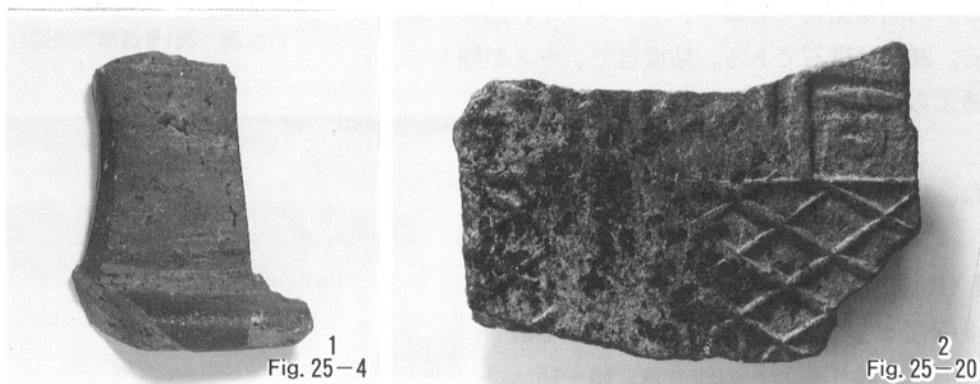


Fig. 27 古代以前の遺物 2

5. 古代末～中世前半の遺構・遺物

281号遺構 (Fig. 28・29・31)

A区第3面から検出した、楕円形の土坑である。278号遺構(井戸)に切られ、半ばを失う。長径115cm以上、短径100cm前後、検出面からの深さは78cmをはかる。

埋土中位から上位にかけて、土師器・瓦器・白磁・陶器などが出土した。ほぼ一列にならんだ出土状況から見て、土坑がうまる過程で、意識的に埋納したものと思われる。

出土遺物を、Fig. 31に示す。1～16は、土師器である。すべて、底部は回転糸切りし、内底部にはナデ調整痕が、外底部には板状圧痕が残る。皿には、底部が若干丸底気味に垂れるもの（1～3・6）と平底のもの4・5・7がある。ただし、法量的には差はない。口径－底径－器高の順に列挙すると、8.7～9.1～7.0～7.7～1.35cm、9.0～6.7～1.5cm、9.0～7.3～1.7cm、9.1～9.2～6.9～7.0～1.45cm、9.2～6.9～7.0～1.3cm、9.3～6.7～1.7cm、9.4～7.1～1.1cm、9.4～6.5～1.5cmをはかる。9～16は、壺である。若干口径が小さい9と10～16とにわかれるが、整形・調整上の差はない。口径－底径・器高の値を示すと、14.4～14.6～9.0～9.3～3.3cm、15.8～16.0～10.7～11.0～3.1cm、15.9～16.0～10.5～10.8～3.2cm、16.0～16.7、10.7～3.5cm、16.2～10.2～10.4～3.2cm、16.2～10.7～3.5cm、16.2～10.2～10.4～3.2cm、16.2～10.7～3.3cm、16.4～10.4～3.4cm、15.7～16.8～10.7～11.1～3.7cmである。17は、瓦器の塊である。内面はコテあての上から幅太のヘラ磨き、外面は横ナデの上から横位のヘラ磨きを施す。貼付高台である。18～22は、白磁碗である。18は薄手で、外面に三条の沈線がめぐる。19・20は、いわゆる玉縁の碗である。21の高台内には、墨痕が認められるが、解読不能。23は、褐釉陶器の小口瓶である。口縁部の周囲に濃褐色の釉をかける。24は、黄緑釉陶器の壺である。外面は、底部近くまで施釉する。内面は露胎であるが、テリがつく。25は、管状土錐である。26は、砥石である。粘板岩で、キメが細かく、仕上砥と考えられる。表面は被熱し、ひび割れている。

おおむね、12世紀中頃の遺構であろう。

349号遺構 (Fig. 30)

A区第3面において検出した、溝状遺構である。幅145cm前後、検出面からの深さは、10～15cmをはかる。軸線をN-26°-Wにとり、ほぼ南北

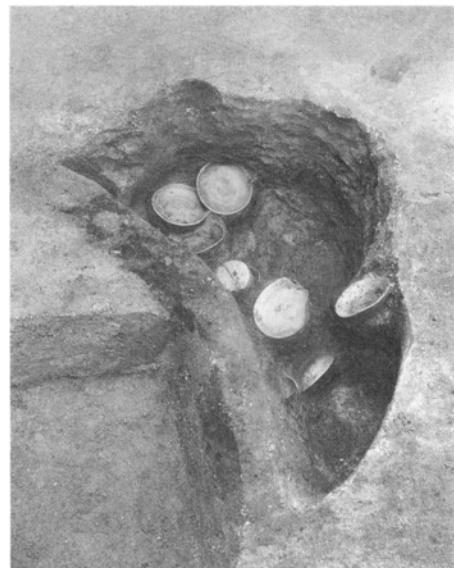


Fig. 28 281号遺構(北東より)

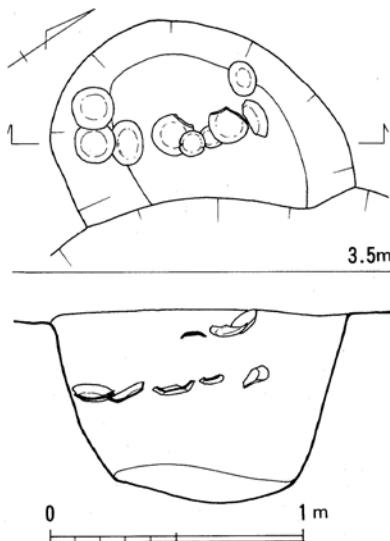


Fig. 29 281号遺構実測図(1/30)



Fig. 30 349号遺構土層堆積状況(南より)

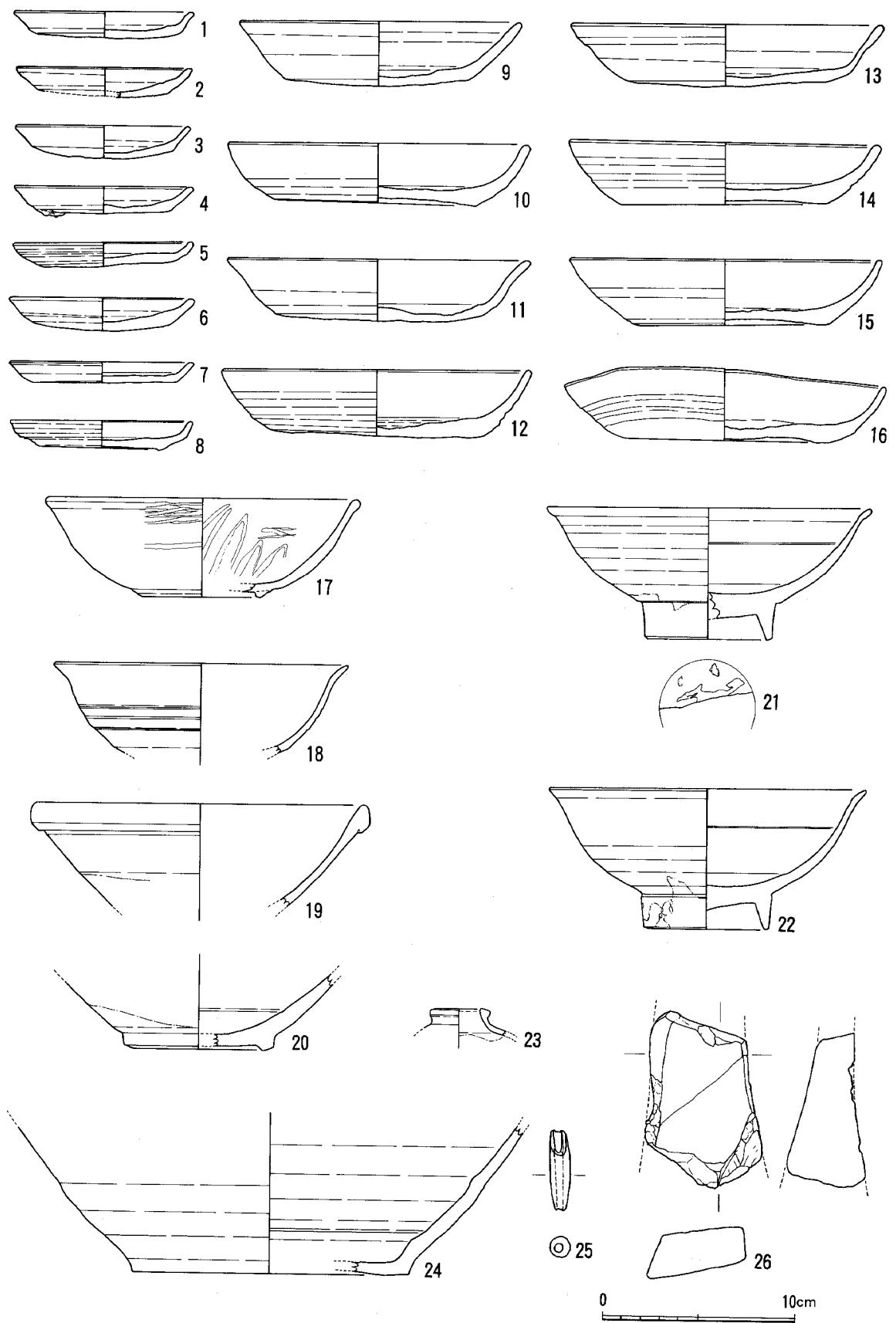


Fig. 31 281号遺構遺物実測図(1/3)

方向を指している。

土師器・瓦器・白磁・青磁・天目・陶器・瓦
・石鍋などが出土している。

12世紀後半を考えたい。

355号遺構 (Fig. 32)

A区第3面検出の井戸である。356号遺構(井戸)に切られ、井側部分を失なう。

土師器・白磁・青磁・陶器・土鍋・瓦・鉄滓
が出土した。

12世紀後半と考えられる。



Fig. 32 355号遺構(南西より)

356号遺構 (Fig. 33~35)

A区第3面で検出した井戸である。第2面において、掘りかたの一部を認めていたが、プラン全体を確認することが出来ず、下層の調査に

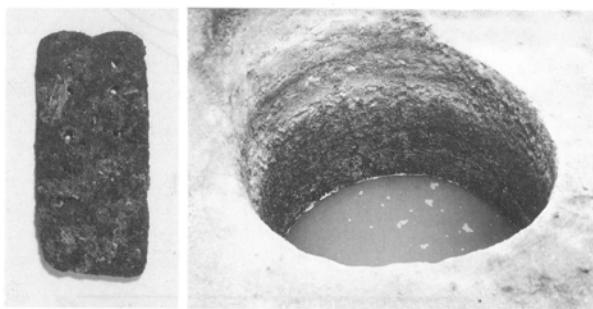


Fig. 33 小札

Fig. 34 356号遺構井側桶



Fig. 35 356号遺構(南西より)

後送りしたもので、本来は第2面に伴う遺構である。第3面上での掘りかたは、径2.4~2.9mをはかる。井側は、木桶を伏せたもので、最下段のみ検出できた。直径は約81cmで、遺存高は71cm強であるが、木質の遺存状態は極めて悪く、湧水の為に崩壊した。

土師器・土鍋・瓦質摺鉢・瓦質火舎・白磁・陶器・鉄滓などが出土した。Fig. 33に示したものは、鎧の鉄製の小札である。碁石頭の伊予札と呼ばれるものにあたる。長さ5.4cm、幅2.5cmをはかる。

14世紀前半頃の井戸と考える。

395号遺構 (Fig. 36・37)

A区3面・C区3面から検出した遺構である。調査区北西壁にかかる。全容を知りえない。調査区内にかかった部分で、一辺8.2mをはかる。検出面からの深さは、90~120cmをはかる。断面をFig. 36に示すが、壁の立ち上りは、南東辺で急で、北東辺では緩い。通常の土坑としては大型で、北東壁の立ち上りが緩いなど地下室の掘りこみとも考えがたい。一応、調査時の所見に従って、大型の溝（濠？）の頭部分としておく。ただし、その当否は、判断しかねているのが実情である。

Fig. 37-1~3は、土師器である。いずれも底部は回転糸切りで、内面をナデ調整する。1・2は皿で、口径-底径-器高はそれぞれ7.8-5.0-1.45cm、8.0-4.9-1.4cmである。3は壊で、同様に12.0-7.6-2.6cmをはかる。4は、白磁の皿である。口縁部を欠くが、口ハゲの皿であろう。5は、瓦質

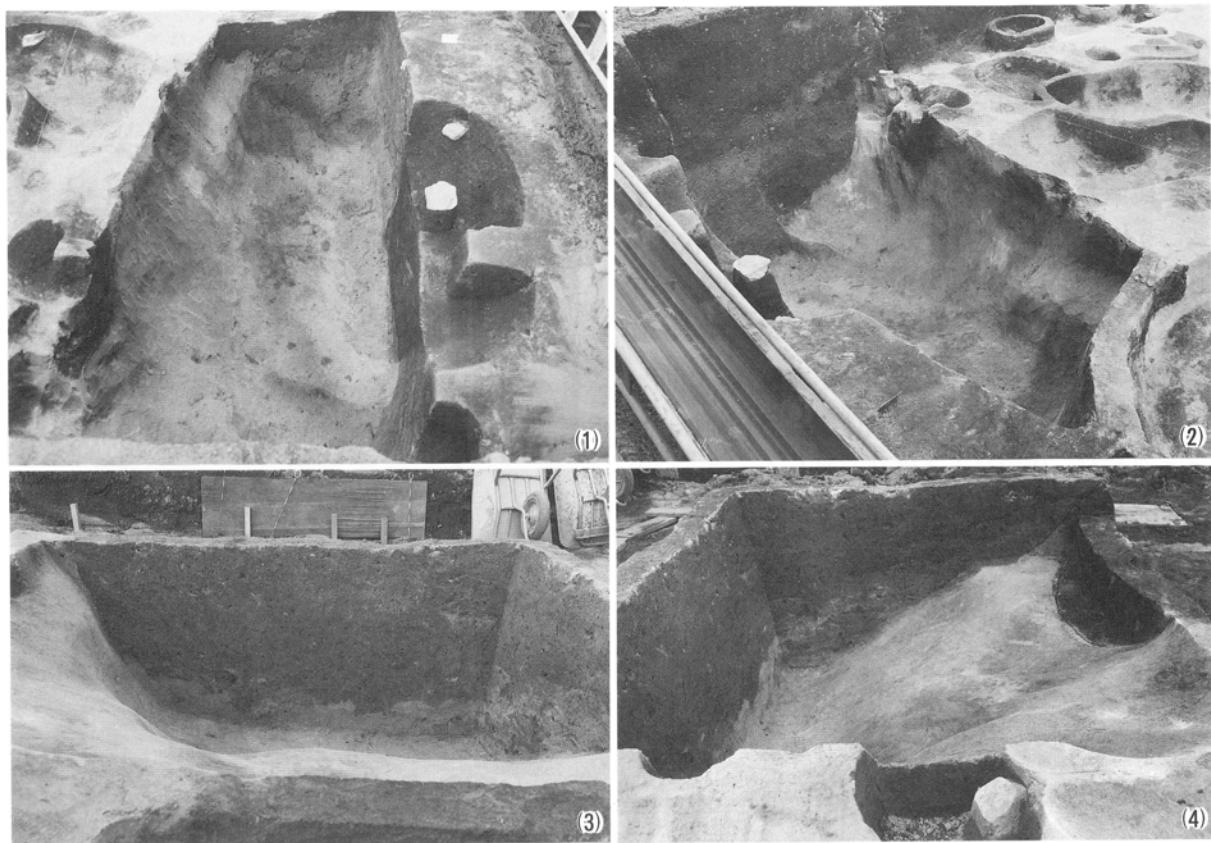


Fig. 36 395号遺構 (1) A区(北東より) (2) 同(西より) (3) 土層断面(北東より) (4) 同(南東より)

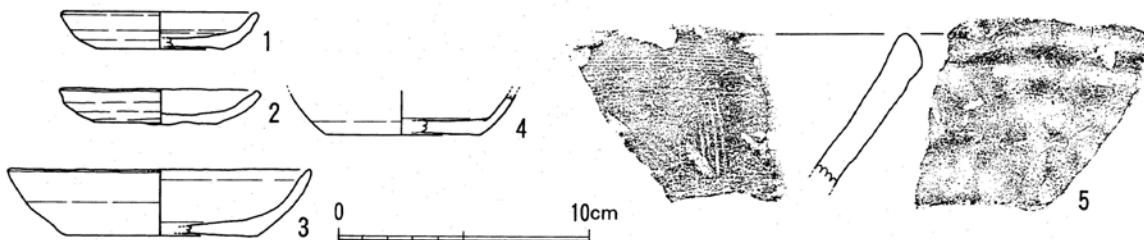


Fig. 37 395号遺構遺物実測図(1/3)

土器の摺鉢である。外面は指頭押圧、内面は横刷毛調整の上に、摺り目を刻む。内面は使用により、摩耗している。

この他、青磁・青白磁・陶器・鉄滓などが出土した。

13世紀後半から14世紀前半に位置付けるのが妥当であろう。

405号遺構 (Fig. 38・39)

A区第3面より検出した、楕円形の土坑である。長径125cm、短径90cm、検出面からの深さ約70cmをはかる。

埋土中より、土師器・瓦質土器・土鍋・常滑窯陶器・青磁・白磁・陶器・瓦などが出土した。実測可能なものを、Fig. 39に示す。1～7は、土師器である。1～3は皿である。いずれも底部は回転糸切り、横ナデ調整によって整形され、内底ナデを行わない。1には、底部穿孔がみられる。口径-底径-器高は、それぞれ7.8～7.9-6.0-1.1cm、8.0-6.4-1.25cm、8.4～8.6-7.2～7.4-1.05cmをはかる。4～7は壊である。いずれも底部を回転糸切りし、横ナデ調整によって整形されるが、6にのみ内底部のナデ

と、外底の板状圧痕が認められる。口径—底径—器高は、それぞれ12.2—7.4—2.4cm、12.6—8.3—2.6cm、13.05—9.0—2.75cm、13.2—8.6—2.7cmをはかる。8は、青磁の碗である。龍泉窯系で、体部に鎧蓮弁文を持つ。畳付から外底を、露胎とする。9は、常滑焼の甕である。口径はN字状に作られるが、未だ下端部の垂れ下りは小さい。小片だが、口径41cm前後に復原できる。10・11は、瓦質土器の鉢である。10は外面ナデ調整で、内面は斜めの刷毛目の上に六本単位の摺り目を刻む。11は底部だが、使用による磨滅が激しく、内面は平滑に磨れる。外面は、指頭痕の上から縦方向の刷毛目を施す。12は、無釉陶器のこね鉢である。赤茶色で胎土の粗い焼き締め陶器だが、使用の為内面は磨耗する。

出土遺物から、13世紀後半に比定するのが、妥当であろう。



Fig. 38 405号遺構(北東より)

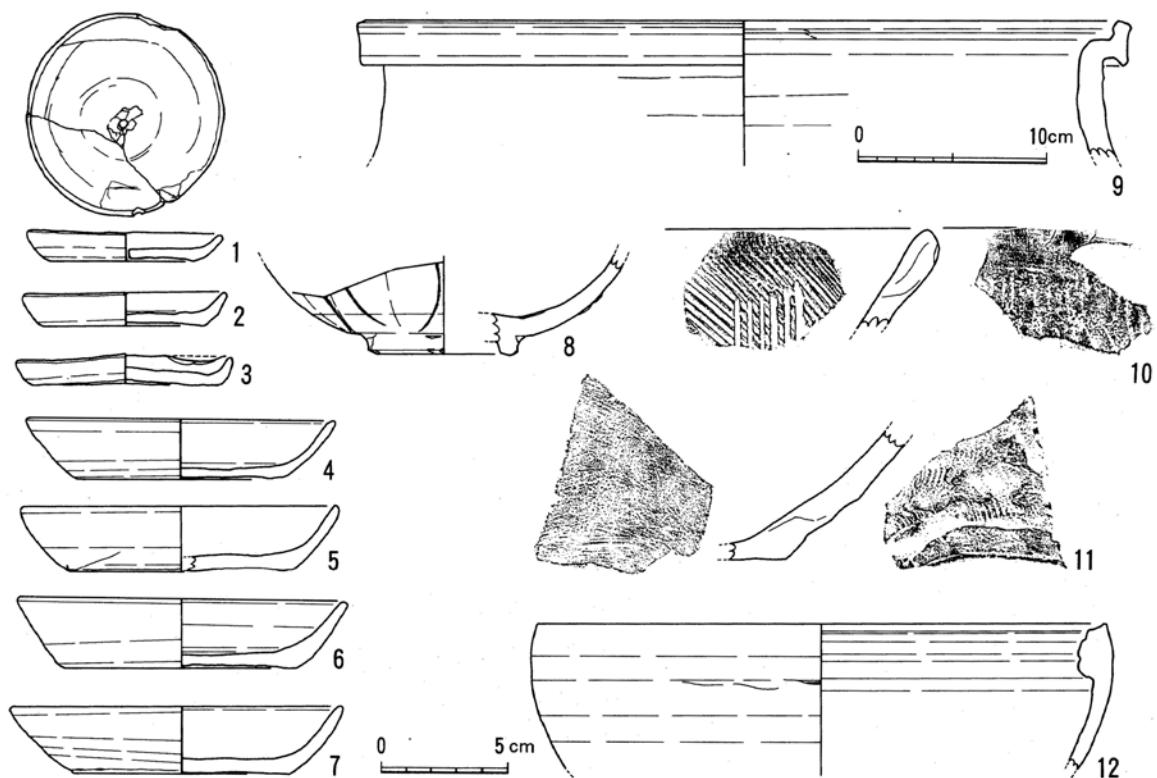


Fig. 39 405号遺構遺物実測図(1/3・9のみ1/4)

490号遺構 (Fig. 11・40~44)

A区第4面から検出した井戸である。径約2mの円形の掘りかたの中央に、木桶を積み上げて井側とする。木桶は、下から2段分を確認した。最下段の桶は、直径54cm、確認できた高さ23.6cmで、その上にひと回り大きい直径60cmの桶を重ねる。上段の桶は、高さ24.6cm分を確認した。

Fig. 42~44に、出土遺物を示す。1～5は、土師器である。1は、皿である。底部は、回転ヘラ切りする。口径10.2cm、底径7.8cm、器高1.1cm。2～5は、塊である。内面は、コテあての後、上半部を横に、下半から見込みをジグザグにヘラ磨きする。外面は、横位のヘラ磨きを施す。6・7は、楠葉型瓦器塊である。6は、内外面とも器表が剥離し調整が見にくいか、ともにヘラ磨きする。8は、須恵器の蓋である。前代の混入遺物である。9～18は、白磁である。9・10は盃で、畳付から底部を露胎とする。11の内面には、線描の曲線文が認められる。13

は、皿である。見込みに蕉葉文を施す。釉下に、うすく黃白色の化粧が施されている様である。18は、全面施釉するが、畳付に耐火土が付着している。外面に蕉葉文を彫っている様である。19は、高麗青磁の碗である。全面施釉するが、外底部には全面に付着物がみられる。20～24は陶器である。20は、緑褐釉の壺である。21は黄釉の壺である。内面は露胎だが、部分的に刷毛塗りをしたらしく、うすく釉がつく。口径部上端に目痕有。22～24は、緑褐釉の盤である。口径部は露胎で、目痕が並ぶ。25・29は、高麗の無釉陶器である。25は短頭壺で、口縁を折り返す。外面は格子目叩



Fig. 40 490号遺構(東より)



Fig. 41 490号遺構井側(北より)

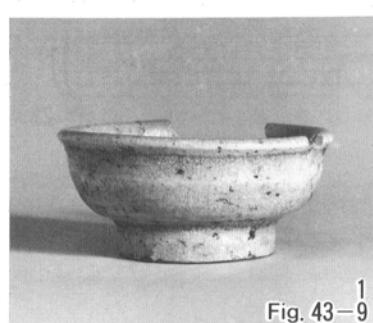


Fig. 43-9
1

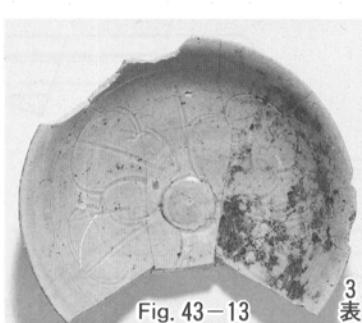


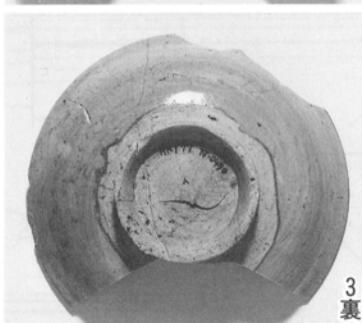
Fig. 43-10
2



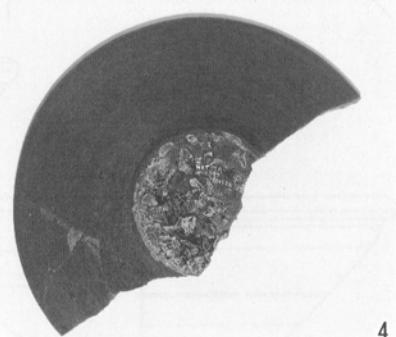
4
側面



Fig. 43-11
2



3
裏



4
表

Fig. 42 490号遺構出土遺物

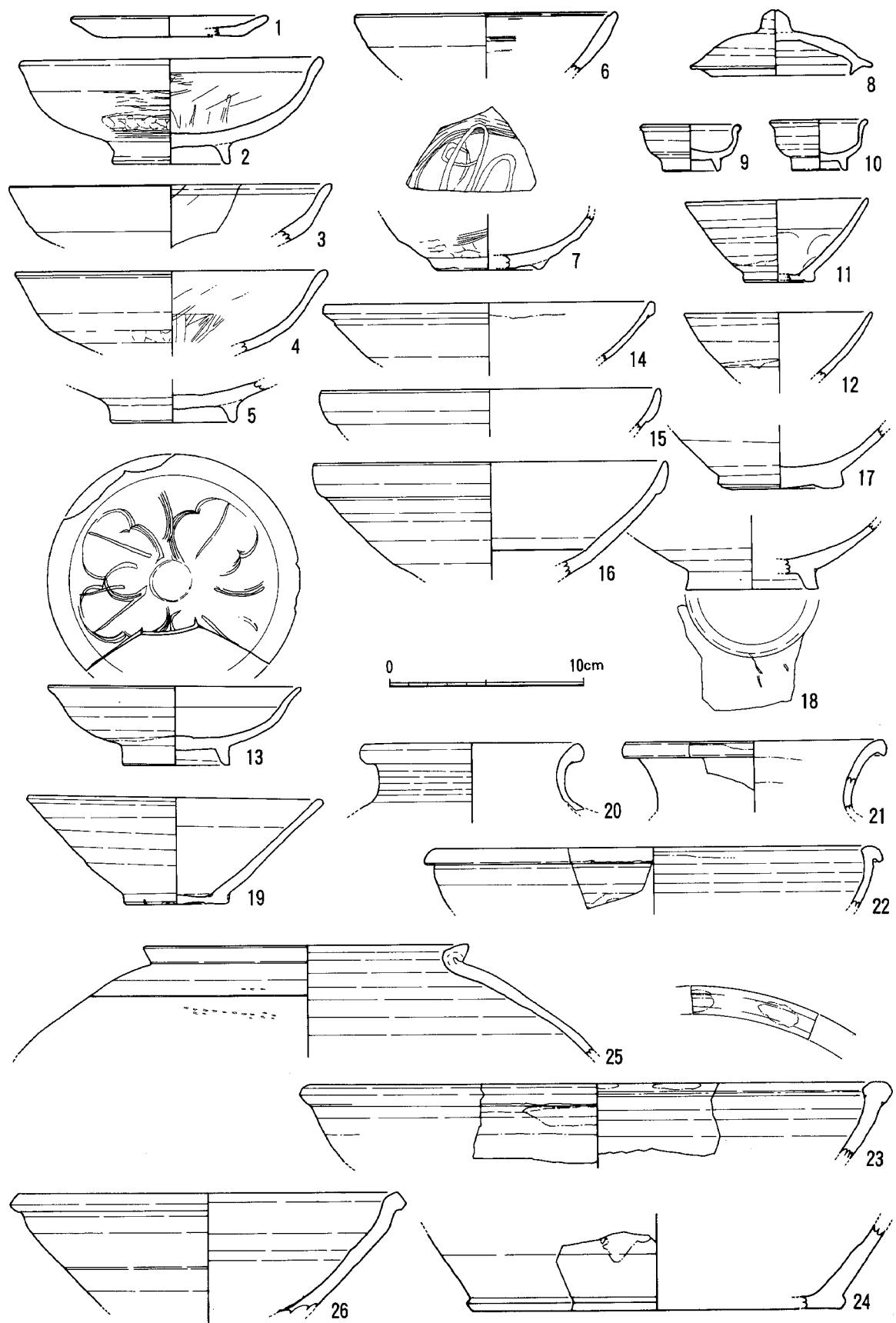


Fig. 43 490号遺構遺物実測図 1 (1/3)

きをナデ消す。内面も叩き痕をナデ消している。29は、大型の甕である。口縁部から頸部にかけては横ナデ、体部は叩きの後ナデ消している。十数片にわかれており、接合できず、図上で復原した。26は須恵器の鉢である。内面は刷毛目調整するが、使用のため磨耗する。外面は横ナデ。29は、須恵器の甕の口縁である。口縁部は横ナデ、体部は叩きで、外面には平行叩き痕、内面には円形の当て具痕が残る。24は

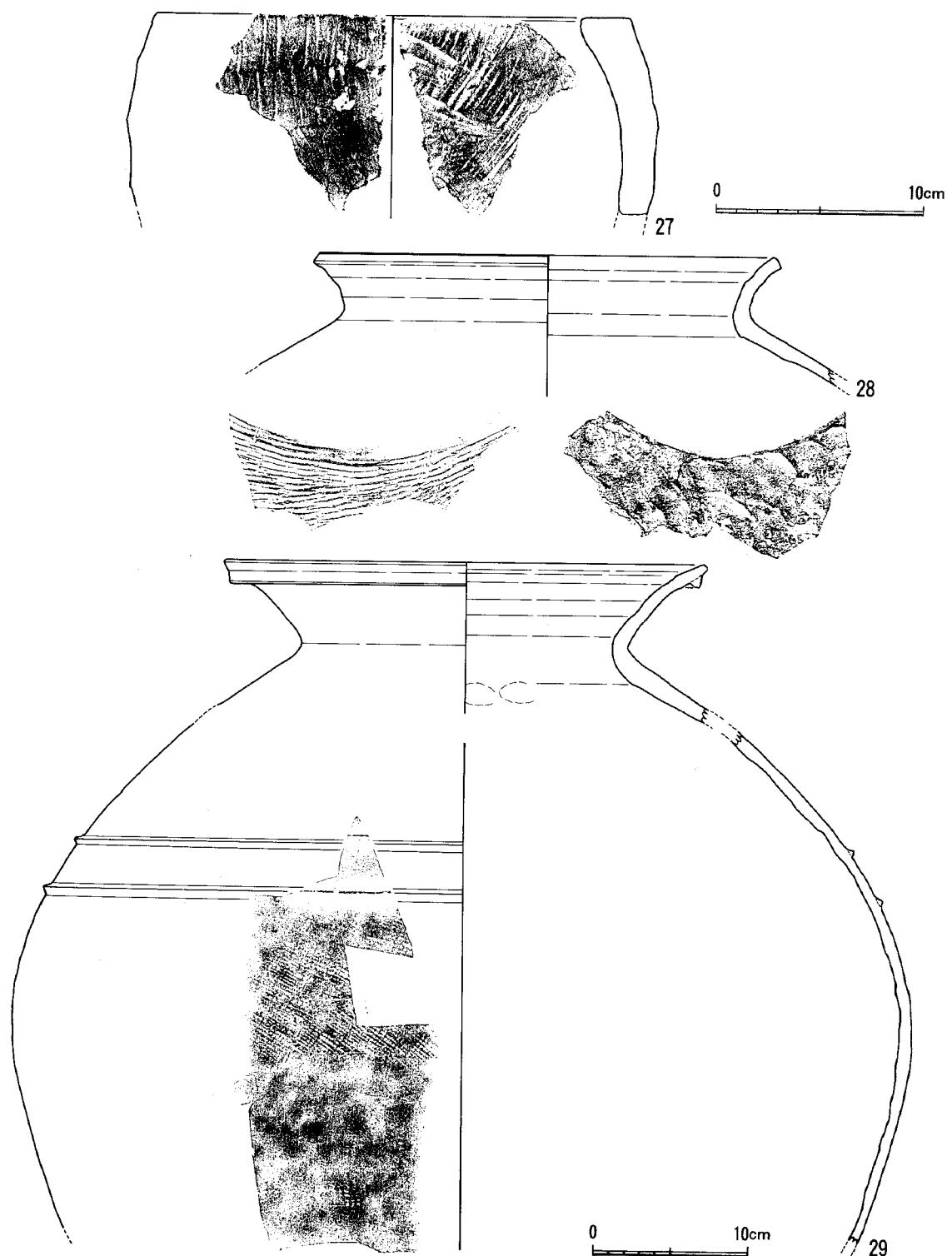


Fig. 44 490号遺構遺物実測図 2 (24…1/3・28・29…1/4)

石鍋片である。堅耳のつくタイプであろう。

11世紀後半の時期があてられよう。

615号遺構 (Fig. 45・46)

B区第3面より検出した井戸である。矢板際の攪乱のため、一部を失う。推定直径1.8mの円形の掘りかたに、径約72cmの木桶を置いて井側とする。桶の高さは、65.6cmまで確認した。

土師器・瓦器・楠葉型瓦器・瓦・白磁・青磁・青白磁などが出土した。

Fig. 45は、白磁碗の外底



Fig. 45 白磁墨書き

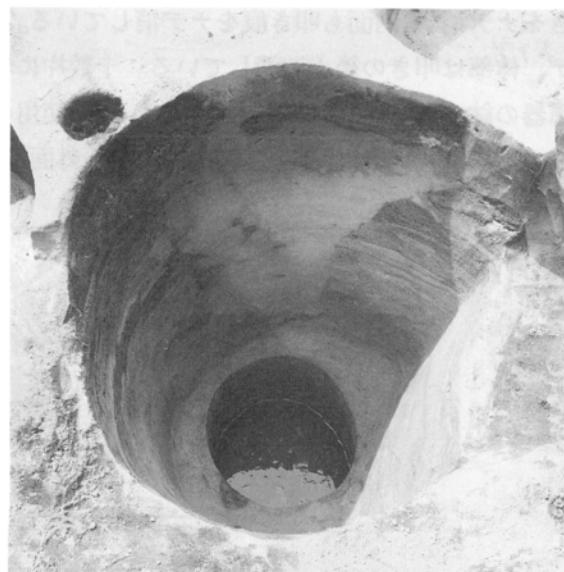


Fig. 46 615号遺構(南東より)

に「六」と墨書きしたものである。

おおむね、12世紀後半の時期が与えられる。

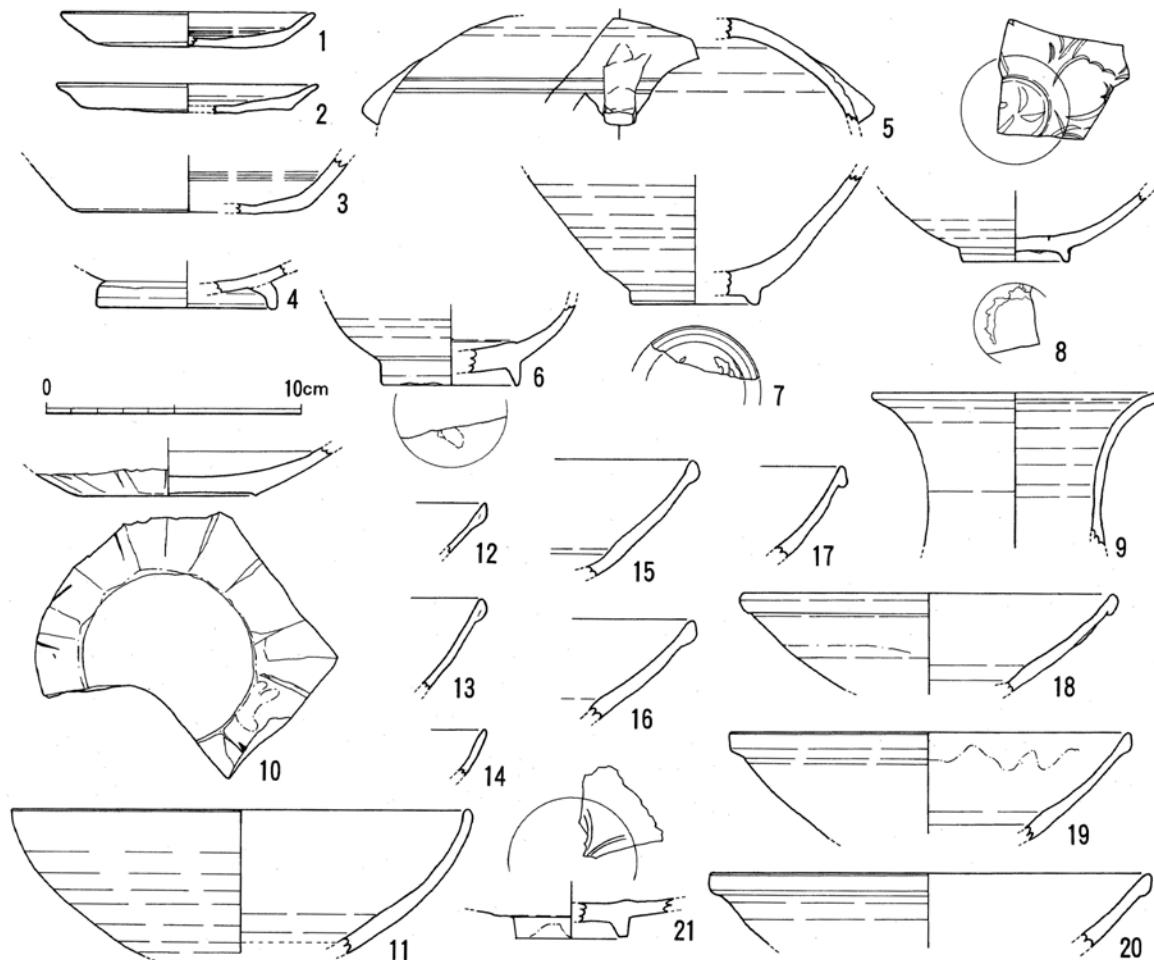


Fig. 47 616号遺構遺物実測図(1/3)

616号遺構 (Fig. 9・47)

B区第3面より検出した井戸である。矢板際の攪乱と615号遺構に切られるために大部分を失い、掘りかたの一部を検出したにとどまった。

出土遺物の一部をFig. 47に示す。1～3は、土師器の皿と壺である。616号遺構出土の土師器壺、皿類は、すべて底部をヘラ切りする。1～2は内底部をナデ調整し、外底には板状圧痕を持つ。口径～底径～器高は、それぞれ10.0～7.6～1.4cm、10.4～7.8～1.1cmをはかる。4は、瓦器壺である。内面をヘラ磨きする。5は、須恵器の壺の肩部である。豊耳がつく。6～9は、越州窯系青磁である。6～8は輪高台の碗で、高台内側に目痕がつく。いずれも全面施釉する。8の見込みには、花文を刻む。9は水注の口縁であろう。薄手で整った作りの、優品である。10～20は、白磁である。10は、皿であろうか。浅く削り込んだ外底部は、露胎となる。この露胎部分に、焼台の形が、うすい黄褐色の円形に認められる。これらの白磁は、すべて太宰府分類に言うII類またはXI類である。

11世紀前半から後半にかかる時期を考えたい。

667号遺構 (Fig. 9・48・49)

B区第3面において検出した井戸である。径1.8m前後の円形の掘りかたの、中央からやや東に寄って、径72cm前後の木桶を据えて井側とする。木桶の高さは、54.7cmまで確認した。

土師器・瓦器・楠葉型瓦器・白磁・越州窯系青磁・陶器・瓦・鉄滓などが、出土した。Fig. 49-1～4は、土師器である。1は皿、2・3は壺である。本遺構から出土した土師器は、すべてヘラ切りである。1は内外面とも横ナデ、2・3は内面コテあて、口縁部外面は横ナデとする。4は、壺である。内面は、太目のヘラ磨きを密に施す。5～11は、白磁である。



Fig. 48 667号遺構(南西より)

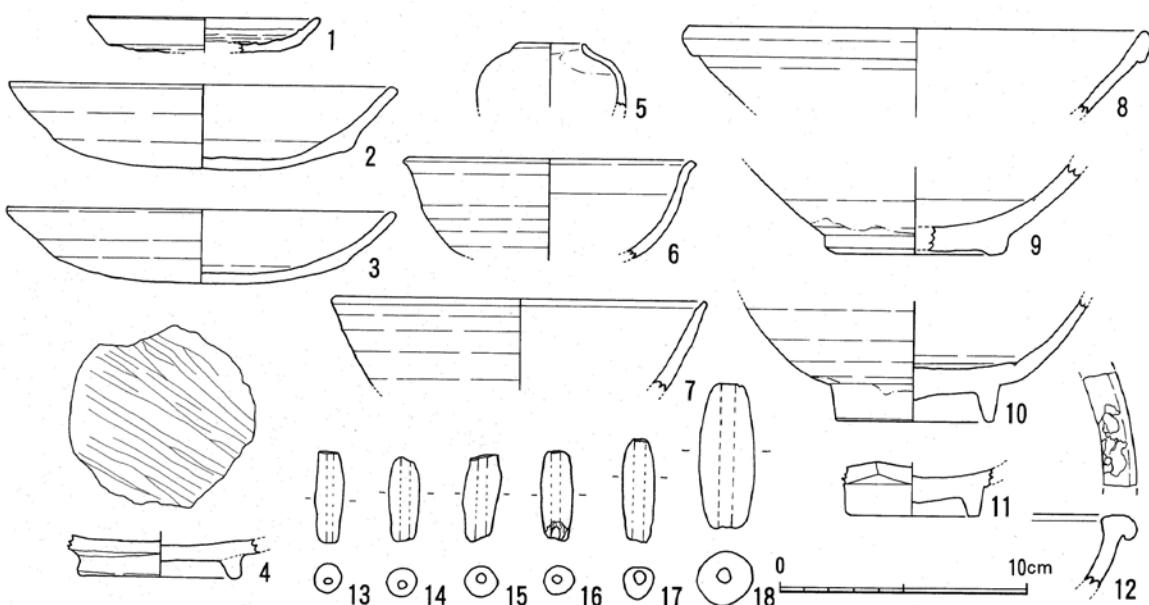


Fig. 49 667号遺構遺物実測図(1/3)

12は、緑褐釉陶器の盤である。口縁部は露胎で、目痕が残る。13~18は、土師質の管状土錐である。18がひときわ大きい以外は、おおむね同大・同径と言える。この他、Fig. 25-4に示した須恵器の円面硯が出土している。

12世紀後半が、考えられる。

670号遺構 (Fig. 9・50・51)

B区3面より検出した井戸である。667号遺構と671号遺構とに切られるが、掘りかたの一
部と井側を検出することができた。掘りかたは、推定
径2.5mの円形を呈する。
井側は木桶で、径66cm、高
さ45cm分が確認できた。

Fig. 51-1~3は、土師器
である。1・2は坏で、底部
をヘラ切りする。口径-底
径-器高は、11.4-6.4-
3.7cm、12.0-6.5-3.6cm

をはかる。3は、高台付坏である。底部と体部との境界付近に、高台を貼りつける。内外面とも横ナ
デで、内底にはナデ調整を施す。4は瓦器塊である。内外面とも、幅の広いヘラミガキを施す。口縁部
のみ炭素が吸着して黒化するが、他は灰色を呈する。5は、白磁碗である。口縁を玉縁につくるが、口
縁断面のこの部分には、小さい空隙がみとめられる。この他、緑釉陶器片、越州窯青磁片、土師竈片、
瓦片などが出土している。Fig. 51-1~3は、4・5に比して明らかに古相を示している。1~3は、掘
りかたからの出土で、4・5は井側内、特に5は最下部から出土した。この点からみて、670号遺構に伴
うのは、4や5であると言える。また、井側内出土の土師器片を見てもすべて底部ヘラ切りで、糸切
りするものは一点も含まれていない。したがって、11世紀後半代を考えるのが妥当と言えよう。

671号遺構 (Fig. 9・52・53)

B区3面で検出した井戸である。670号
遺構を切り、672号遺構・674号遺構に切ら
れる。径3.7mの円形の掘りかた中央に、直
径69cmの木桶をすえて井側とする。確認し
た範囲内での木桶の高さは、41.2cmをはかる。

土師器・黒色土器（B類）・瓦器・楠葉
型瓦器・青磁・白磁・陶器・滑石製錐など
が出土した。Fig. 53-1・2は、越州窯系青
磁碗である。輪高台の疊付と見込みに、重



Fig. 50 670号遺構(南東より)

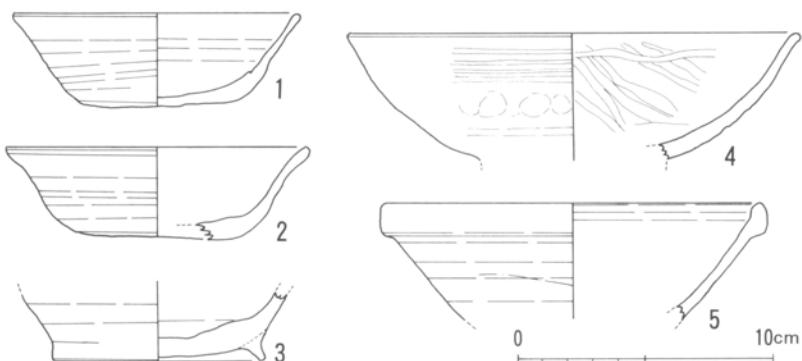


Fig. 51 670号遺構遺物実測図(1/3)



Fig. 52 671号遺構(南東より)

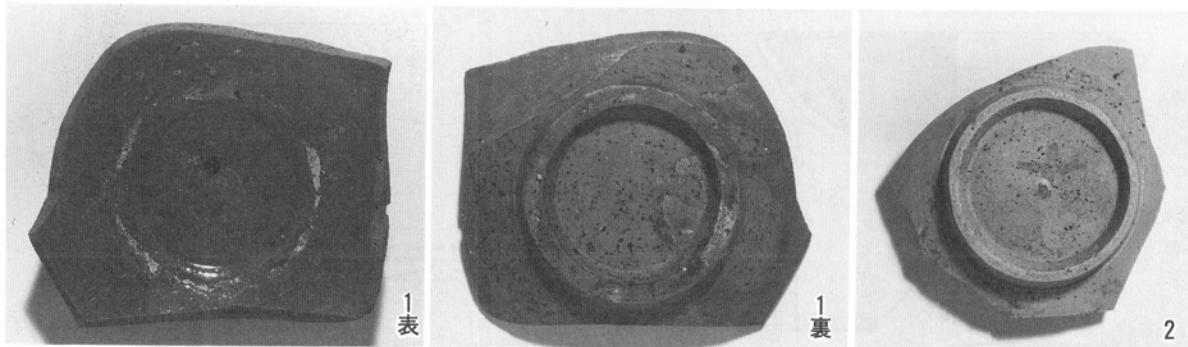


Fig. 53 671号遺構出土遺物

ね焼きの目痕がつく。2は、白磁碗である。外底部高台内の露胎部分に、「十」字を墨書する。出土遺物を全体的にみて、12世紀後半と考えられる。

673号遺構 (Fig. 9・54)

B区3面で検出した井戸である。長径2.1m、短径1.9mの楕円形の掘りかたに、中央からやや東に寄って、径約60cmの木桶を置いて、井側とする。木桶は、高さ約70cm分を検出した。

土師器・瓦器・白磁・青磁・陶器・滑石製品などが出土地した。

おおむね、12世紀後半代にあてることができるよう。



Fig. 54 673号遺構(北東より)

674号遺構 (Fig. 9・55・56)

B区3面において検出した井戸である。前述した671号遺構（井戸）を切る。掘りかたは、長径4.1m、短径3.2mの楕円形を呈し、その中央に直径63cmの木桶を据えて、井側とする。木桶は、腐食して木質の痕跡しか残っていないが、高さ73cm分を確認した。

出土遺物の一部を、Fig. 55に示す。1は、内黒土器の塊である。内面は密にヘラミガキし、口縁直下に一条の沈線を巡らす。外面は横ナデである。内面のみ炭素を吸着させ、暗灰色を呈する。2は、黒色土器の塊である。内外面とも、炭素が吸着し、黒色を呈する。器表には、埋土中の鉄分と共に砂が付着し、調整痕が確認できなかった。3は、緑釉陶器の塊である。内外面とも、密にヘラミガキする。底部は、削り出しの円盤高台で、回



Fig. 55 674号遺構(北西より)

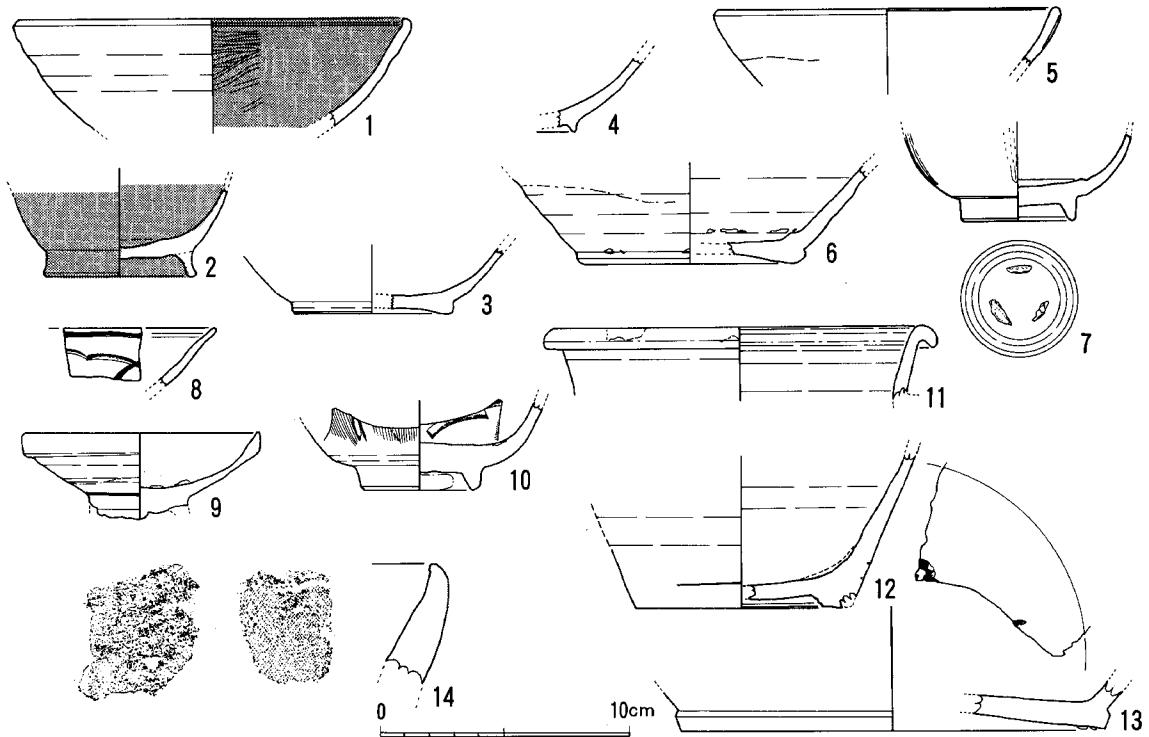


Fig. 56 674号遺構遺物実測図(1/3)

転ヘラケズリする。胎土は土師質で、淡灰褐色を呈する。釉は、淡緑色で、全面に施される。4は、高麗青磁の碗片である。灰色でキメの若干粗い胎に、青緑色の釉を施す。5～8は、越州窯系青磁の碗である。5は、口縁端部から体部外面の上半にかけて、釉下に白化粧をする。6は、円盤高台の碗である。体部下半から平高台部分は、露胎となる。見込みと、高台と体部との境目付近に、重ね焼きの目痕が付く。7は、輪高台の小碗である。体部には、ヘラで凹線を垂下させ、輪花につくる。全面に施釉する。高台内に、重ね焼きの目痕が3ヶ所認められる8は、口縁部の小片である。非常に薄手に整形されており、内面には幅の狭い片切彫りで、花文を描く。胎土は淡茶色で、キメ細く、精良である。9は、白磁の皿である。高台内には、窯内の土が付着している。10は、青磁の碗である。畠付から高台内側を露胎とするが、一部釉が外底にまわり、ハマの耐火土が付着している。内面には、片切彫りと櫛描文で花文が、外面は片切彫りで花弁を描き、その中に縦に櫛描文を垂下させる。11・12は、褐釉陶器の壺である。11は口縁部で、ゆるく折り返した口縁上面は露胎とし、ここに目痕がつく。灰色の胎土に、褐色がかかったオリーブ色の釉をかける。12は、底部である。濃灰色の胎土に、オリーブ色の透明釉を施す。13は、暗緑色釉陶器の盤である。外底部は露胎で、端近くに耐火土が付着する。内底には、印文の一部がみとめられる。14は、焼塩壺である。ゆるく内弯した口縁部の破片で、内面には布目压痕がついている。

この他、土師器（回転糸切り）・青磁（同安窯系・龍泉窯系）・白磁・瓦器・瓦・天目茶碗・鉄釘・鉄滓などが出土地で出土している。これらからみて、12世紀後半の井戸と考えられる。

764号遺構 (Fig. 9・57~59)

C区第3面、調査区北角付近で検出した井戸である。395号遺構・754号遺構・755号遺構・756号遺構・767号遺構などと重複関係にある。また、掘りかたの一部が調査圧外に出るが、おおむね長径3.6m、短径3.0m程度の楕円形を呈するものと復原できる。井戸は、直径78cmの円形の木桶であるが、遺



Fig. 57 764号遺構(北西より)



Fig. 58 764号遺構井側(西より)

存状態が極めて悪かった。木桶の高さは、64.3cmを確認することができた。

出土遺物は多量で、土師器（回転糸切り）・瓦器・白磁・青磁（初期龍泉窯・龍泉窯系・同安窯系）・越州窯系青磁・青白磁・陶器・焼塩壺などが出土した。Fig. 59に示したのは、白磁碗の底部である。外底部の高台内側に、文字もしくは花押が墨書きされている。

12世紀後半から13世紀初め頃にあてることができよう。



765号遺構 (Fig. 9・60・61)

C区第3面で検出した井戸である。764号遺構（井戸）・767号遺構（井戸）に切られ、大半を失なう。掘りかたのごく一部が、764号遺構と767号遺構の南側に、扇形に残っていた。井側は、764号遺構掘りかたの下部から、やはり半ば以上を切られて検出された。井側は、板材を、角の落ちた方形に組んだものである。木質の遺存状態が悪くて、木目の方向等不明なので、板材の方向はわからない。板組は上下2段残っていた。上下はほぼ同大で、きちんと重ね合わされていたものと思われる。上段は高さ2cm程度、下段は高さ約30cm分が残っていた。



Fig. 60 765号遺構(南東より)

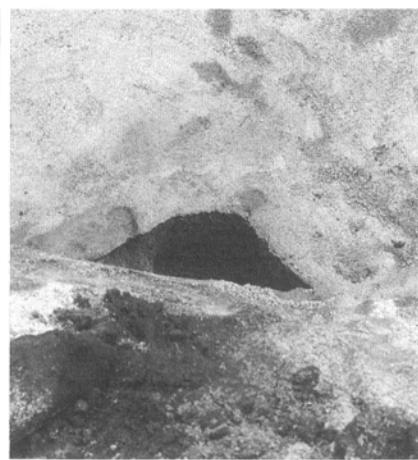


Fig. 61 765号遺構井側(北西より)

土師器（ヘラ切り・糸切り）・白磁・陶器・瓦・鉄釘などが出土した。

12世紀前半代の井戸と考えられる。

767号遺構 (Fig. 9・62・63)

C区第3面で検出した井戸である。764号遺構(井戸)に切られる。径2.8mの略円形の掘りかたの、中央からやや東に寄って、直径75cmの木桶をおいて、井側とする。木桶の遺存状態は極めて悪く、かろうじて桶と確認できた程度であった。桶の遺存高は、60cm程度まで検出したところで湧水の為に崩壊し、以下を確認することはできなかった。

土師器（糸切り）・瓦器・青磁（龍泉窯系・同安窯系）・白磁・青白磁・陶器などが出土している。Fig. 63に示したのは、白磁碗の底部である。高台内に、墨書が認められる。底部の過半を欠くので全体は知りえないが、二行書きにしており、左行の文字は、「綱」であろう。

井戸の時期は、12世紀後半と考えられる。



Fig. 62 767号遺構(北東より)



Fig. 63 767号遺構出土白磁墨書

6 中世後半の遺構・遺物

155号遺構 (Fig. 65~68)

A区第2面より検出した、石組土坑である。一辺85cm~95cmの隅丸方形の掘りかたに、大小の自然礫を組んで、内法で一辺51cmの方形の室をつくる。検出した室の深さは、約25cmである。床面は、掘りかたの底面のままで、特に手を加えていない。石組の内壁は、直線的にそろい、



Fig. 64 155号遺構土師器出土状況(北より)

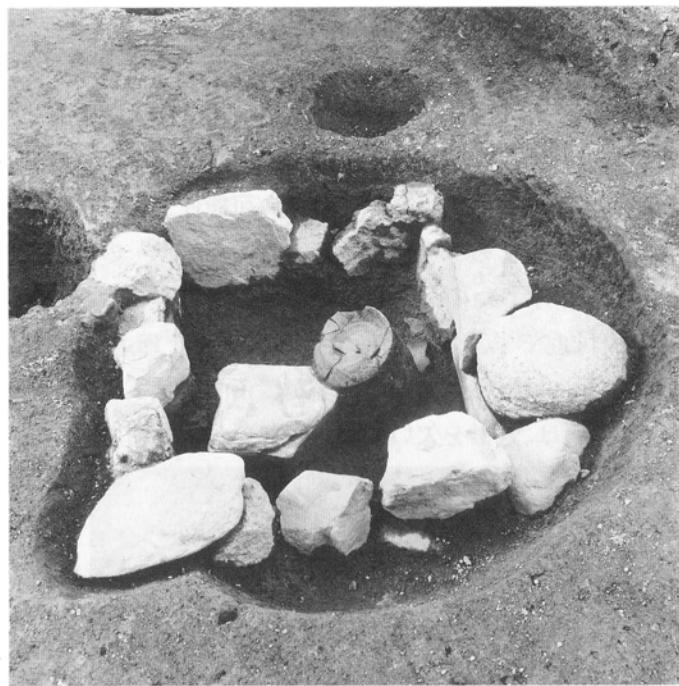


Fig. 65 155号遺構(南より)

垂直に立つが、裏込めの礫はない。石組をつくりながら、周囲に土を落して、埋め固めていったものと思われる。

遺構のほぼ中央の埋土上位に、土師器壺が置かれていた。壺は、2枚が合せ口になる様に重ねてあり、土坑廃棄時におけるまじない的行為をうかがわせている。特に壺内に納められた物は、見当らなかった。

Fig. 68-1・2に示したのが、重ねられていた土師器壺である。底部は回転糸切りで、内底ナデ、外底の板状圧痕を持つ。口径・底径・器高は、それぞれ11.4-6.3-2.4cm、11.5-6.8-2.8cmをはかる。3は埋土中より出土した土師質土器の摺り鉢である。内面には、5本を単位とした摺り目を刻むが、使用のため磨耗している。内面

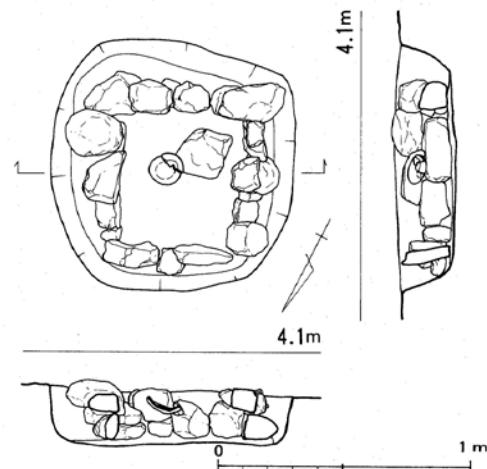


Fig. 66 155号遺構実測図(1/30)

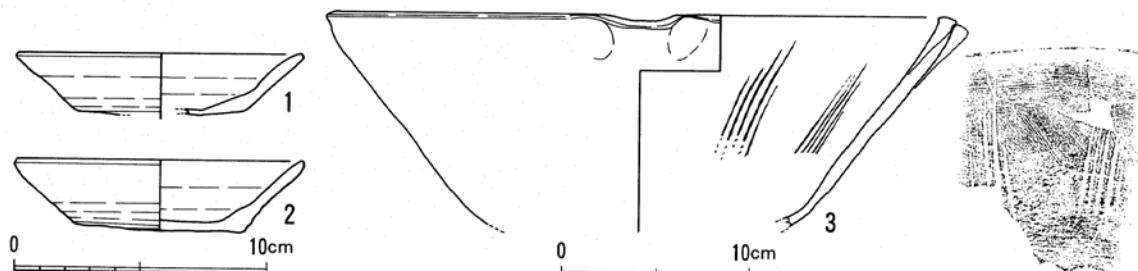


Fig. 67 155号遺構遺物実測図(1/3)

は刷毛目、外面はナデ調整する。口径の一部を外方につまみ出し、片口につくる。この他、瓦片・青磁・白磁・鉄滓などが出土した。

おおむね、16世紀頃にあてられよう。遺構の性格は、不明である。

165号遺構 (Fig. 69~71)

A区第2面で検出した土坑である。第2面上で、まず五輪塔の地輪と思われる石造品を検出、それから土坑プランを確認したものである。したがって、地輪と土坑とが伴わない可能性も有りうるが、地輪の石が土坑のほぼ中央にあった点から、とりあえず単一の遺構と考えている。

Fig. 71に示したのが、五輪塔の地輪と思われる石造品である。縦に丁度中央付近で半裁された形で残っている。Fig. 71に即して各面を見ると、左面には阿弥陀如来の種子が、正面には不動明王(?)の種子が刻まれる。右面は、大半を欠いてわからないが、弥勒菩薩か虚空蔵菩薩ではな

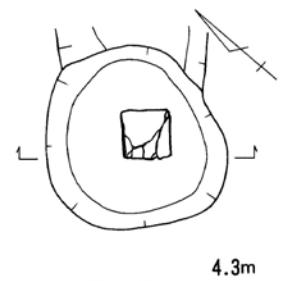


Fig. 68 165号遺構実測図(1/30)

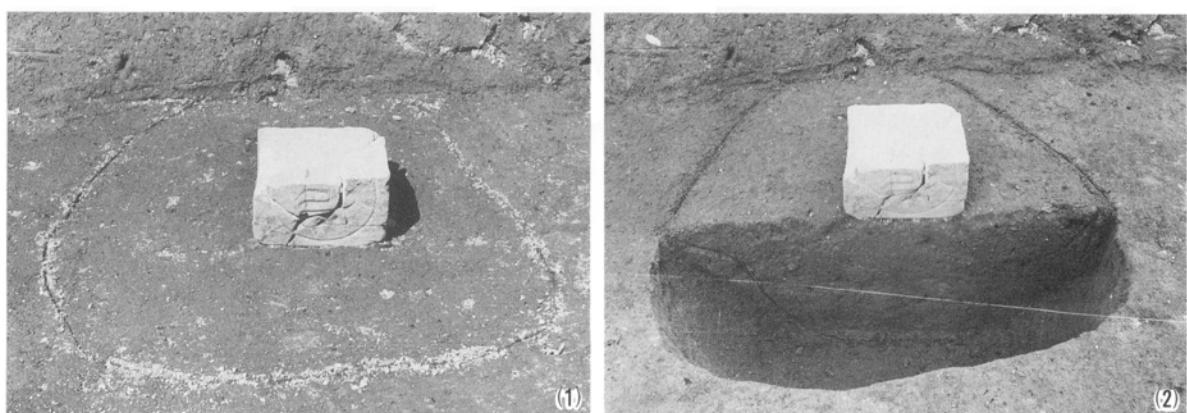


Fig. 69 165号遺構 (1) 検出状況(南より) (2) 土坑実掘状況(南より)



Fig. 70 165号遺構地輪

かろうか。出土状況は、Fig. 70に見る様に、種子を彫った面を下に向けており、本来の石塔としての体裁を失なっていたことは明らかである。

石塔の下の土坑は、径73cm前後の略円形を呈し、検出面からの深さは、30cmをはかる。埋土中からは、土師器（糸切り）・瓦質土器こね鉢・青磁・白磁・陶器・鉄釘・鉄滓などが出土した。

出土遺物から見た土坑の時代は、おおむね15世紀代である。したがって、土坑と石塔が伴わないとしても、石塔の地輪が何かに転用する為ここに据えられたのは、15世紀代のことと見られる。

181号遺構 (Fig. 6・72・73)

A区第2面で検出した柱穴である。直径39cmの略円形を呈し、検出面からの深さは15cmをはかる。

柱穴の中央から南寄りに、板碑片を据える。板碑片は、頭部付近の断片で身部以下を欠く。表面を上にむけて、ほぼ水平におかれており、この平坦面で柱根を受けたものである。

Fig. 73に、板碑片を示す。赤褐色の砂岩製である。頭部は山形に削る。山形の下部は、水平に二本の沈線を入れ、その下に幅の広い額部をもうける。身部は、額部から一段削り込んだ平坦面である。本板碑は、額部の一部から身部の上端付近で折損している。身部上端の遺存部分には、種子の一部が認められる。

磨滅気味なのと、彫りが浅いことから、種子を解読しがたいが、頂部の点とその下の横一棒、横棒の右端から左下に向けて斜めに下る線がみえる。金剛界五仏の内の東方阿閦如来の種子(ウン)に似るが、下半を欠くため断定はできない。

この他、土師器片・須恵器片などが出土地している。

時期を決める手がかりを欠くが、第2面の年代観から、15~16世紀代を考えたい。

523号遺構

(Fig. 6・74・75)

B区第2面より検出した、方形の土坑である。長辺310cm、短辺265cmの長方形を呈し、検出面からの深さは



Fig. 71 181号遺構(西より)

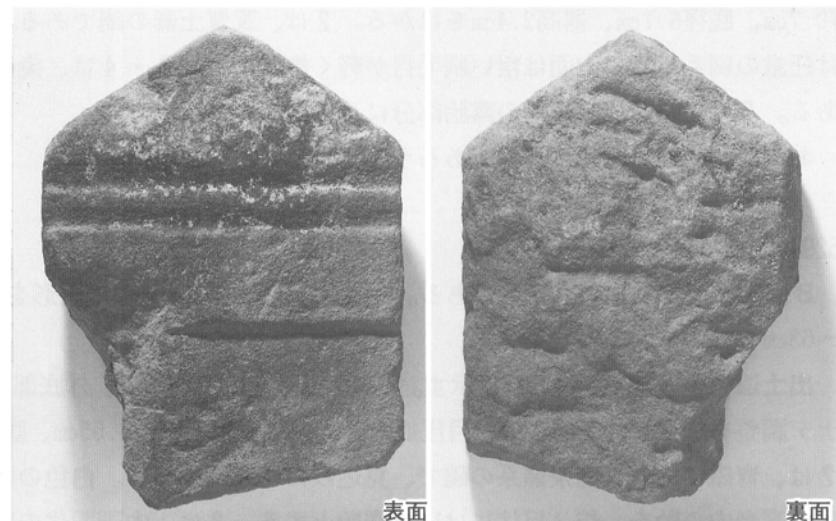


Fig. 72 181号遺構出土板碑



Fig. 73 523号遺構(西より)

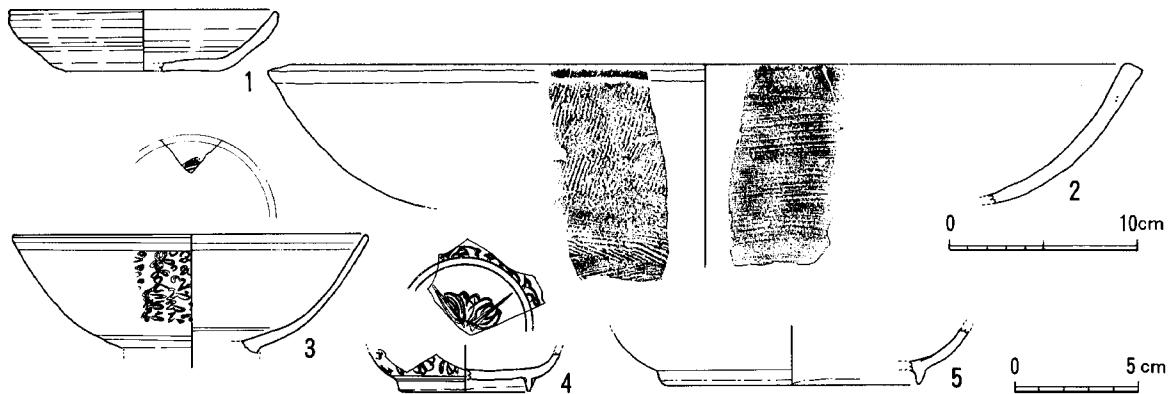


Fig. 74 525号遺構遺物実測図(1/3)

約25mをはかる。壁は垂直に近い急角度で立ち上り、床面は平坦に作る。土坑内に柱穴などは見当らないが、半地下式の建物を想定したい。

埋土中から、土師器・青磁・白磁・明代染付・朝鮮王朝陶磁器などが、出土した。その一部をFig. 76に示す。1は、土師器である。底部は回転糸切りで、体部および内底部は、横ナデ調整する。口径10.7cm、底径6.1cm、器高2.4cmをはかる。2は、瓦質土器の鍋である。外面は縦方向の刷毛目、外底は任意の刷毛目で、内面は粗い刷毛目が軽く施される。3・4は、染付である。中国の明代の製品である。5は白磁皿で、畳付の露胎部分には、砂粒が付着する。

おおむね、16世紀代の遺構であろう。

529号遺構 (Fig. 6・76・77)

B区第2面で検出した土坑である。長径246cm、短径265cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは、60～63cmをはかる。

出土遺物の一部を、Fig. 77に示す。1は、土師器の皿である。外底部を回転糸切りする。内底部にはナデ調整を加え、外底部には板目圧痕がつく。法量は、口径8.55cm、底径6.0cm、器高1.7cmをはかる。2は、青磁である。龍泉窯系の碗で、見込みに印花文を持つ。白色の胎に、緑色の釉をたっぷりとかけ、高台内の釉を、蛇ノ目状にはいで露胎とする。3は、中国明代の染付（青花）皿である。全面施釉した後、畳付の釉を削って露胎とする。4は、瓦質土器の獸脚である。本来の断面は正円形に近いものと思われるが、脚の表面は剥離がひどく、明らかではない。上部も欠損しており、容器本体とどういう接ぎ方をしていたのかも不明である。獸脚の文様は、型押しによる龍面である。灰色で若干砂粒を含む胎土だが焼成は良く、しっかりと焼されて、光沢のある灰黒色を呈する。脚部の厚みがあることからみて、火舎に付けられた脚と考えられる。5は、備前焼きのすり鉢である。内面には、8本単位のすり目を刻む。口縁は、体部から「く」字にまがって、ほぼ直に立つ。屈曲部付近の口縁部下端は、若干下方に突き出す。備前焼編年V期前半におかれるものである。6は、土鍋である。外面はナデ調整、内面には横方向の刷毛目調整を行う。外面の器壁には、煤が付着している。7・8は、瓦質土器のすり鉢である。ともに内面は横位の刷毛目、外面は縦位の刷毛目で、口縁部付近は横ナデする。7・8とも、内底部は使用のため磨滅し、すり目が消える。7で、口径25.4cm、底径11.0cm、器高10.6cmをはかる。

16世紀前半代の遺構と考えられる。

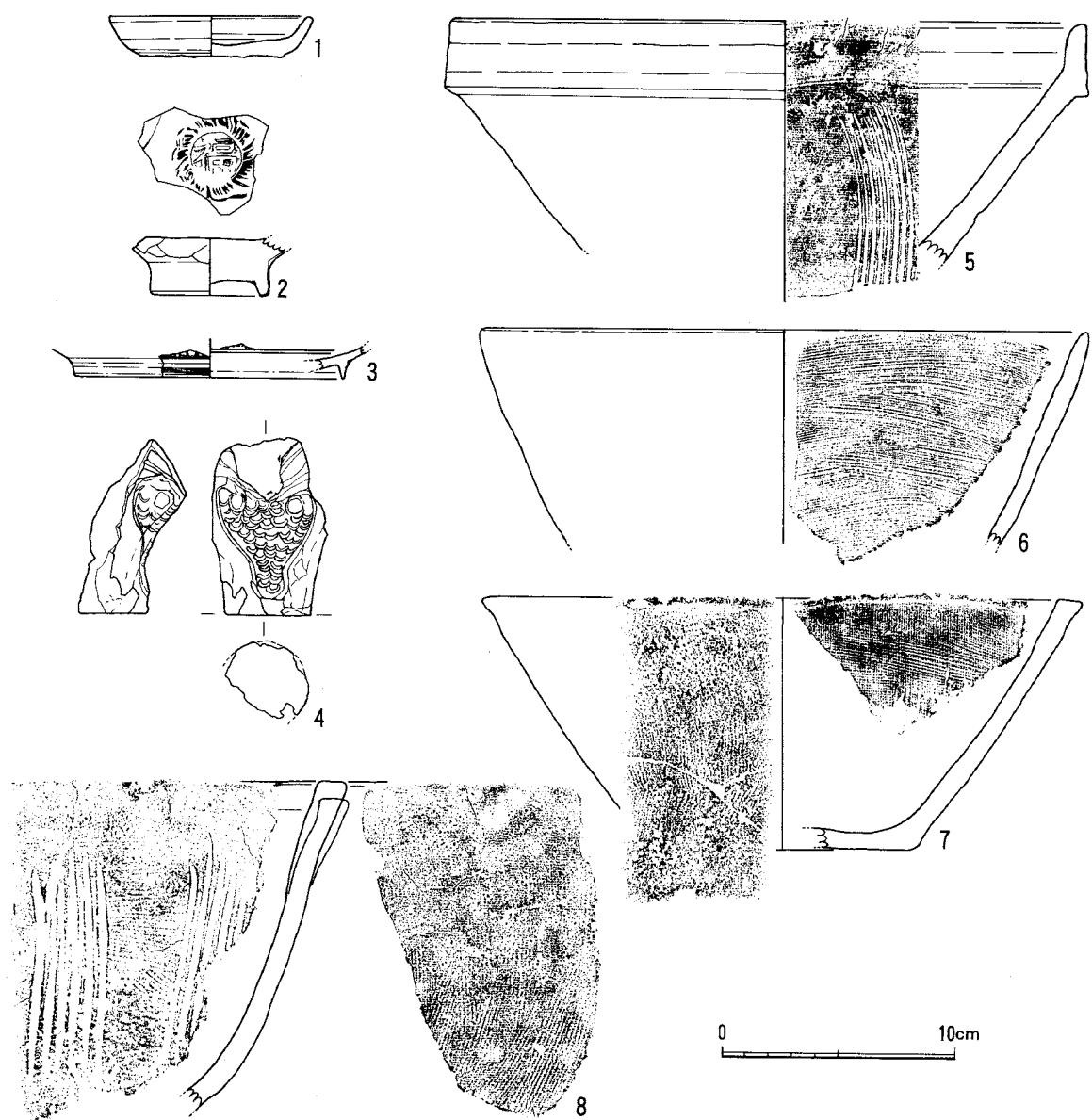


Fig. 75 529号遺構遺物実測図(1/3)

7 近世の遺構・遺物

023号遺構 (Fig. 76・77)

A区第1面で検出した方形土坑である。135×145cmの長方形の掘りかた内に、瓦と石で方形の枠形をつくる。土坑のプランは、南角が欠けて入り角状となる。当初、遺構の切り合いかと思い、土坑中央に幅20cmのトレーニングを設定した。しかし、トレーニングの壁面においても、切り合いかは認められなかった。

石組（瓦も用いているが、便宜的にこの呼称に統一する）は、その北角付近を024号遺構に切られている。北東壁と南東壁は、主として平瓦を積み上げる。瓦は、平らに置き、小口を見せる様に積まれるが、瓦の長側辺を見せるか、短側辺を見せるかは、統一されていない。

南西壁は、南角から15cm分しか検出されなかった。この部分は、石を二段に積んでいる。南西壁石積の北西面は、きちんと面をそろえており、崩されたり、石を抜かれた様子はない。したがって、南西壁は、袖石状に、南角から15cm程突出するにとどまったものと考えられる。

北東壁では、大き目の石がひとつ出土した。ただし、これに接して石の抜き穴があり、少なくとももう一個の石が置かれていたことがわかる。

北東壁が、石の抜き跡までのびると、土坑掘りかたの突出部分まで壁が作られていたことになる。また、南西壁の袖部分は、丁度掘りかたが入り角を作つて南西へ突出する部分にあたる。これらの点を考えると、石組は南西の突出部分に向つて、開口していたと考えざるを得ない。おそらく素掘りであったろう突出部分は、石組への昇降口であったのだろう。

石組は、その簡単な積み方からみて、高い壁を作つては考えがたい。おそらくは、検出した高さ（北東壁で16cm前後）を大きく上回るものではないだろう。用途を特定する材料はないが、半地下の簡単な溜め枠を想定したい。なお、石組の内法は、北東壁で推定92cm、南東壁で60cmをはかる。

埋土中からは、土師器（皿、灯明皿など）、肥前系陶磁器の小片が出土した。時期を確定することはできないが、江戸時代の範囲内で考えたい。

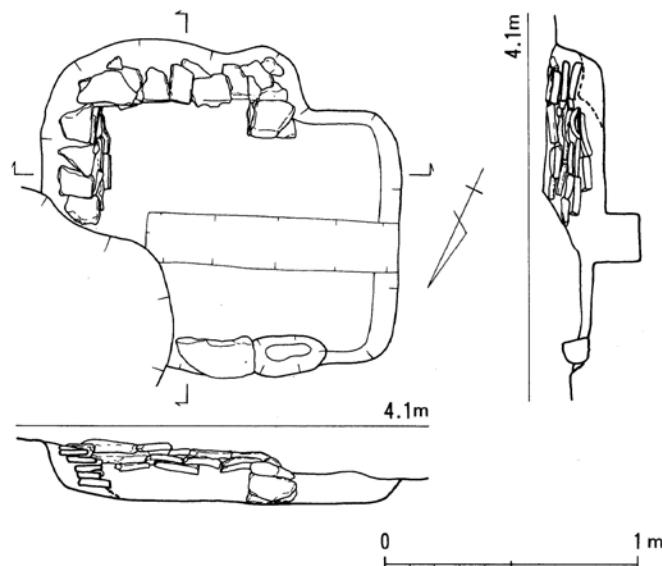


Fig. 76 023号遺構実測図(1/30)



Fig. 77 023号遺構(南西より)

024号遺構 (Fig. 83)

A区第1面検出の土坑である。前頃で述べた023号遺構を切る。埋め甕土坑で、甕の外周に合わせて径115cm、深さ85cmの円形土坑を掘り、その内壁に甕をはめていた。

埋め甕は、底を抜いたもので、しかも体部も割れていた。口縁部の高さがずれていたので、甕を埋めた後に割れたのではないことは明らかで、土坑内壁に破片をはめこんだものと思われる。便所の便槽と考えたい。



Fig. 78 024号遺構(北西より)

071号遺構 (Fig. 79~81)

A区第1面において検出した土坑である。長径95cm、短径80cmの卵形を呈し、深さは検出面から26cmをはかる。埋土中に、多量の礫・鉄滓・炉壁等を含んでいた。近辺で製鉄（小鍛冶）を行なった廃棄物を埋てたものであろう。

出土遺物を、Fig. 81に示す。1は、焼塩壺である。土師質。手提ねで、外面はナデ調整する。内面には、うすく布目が残る。2~4は、肥前磁器である。2は白磁の小碗で、畳付には砂が付着する。3は染付の皿である。高台は釉を搔き取り、蛇ノ目状につくる。外面に丸い剥離痕があり、脚を貼り付けていたものと思われる。見込みには、二重



Fig. 79 071号遺構(北東より)

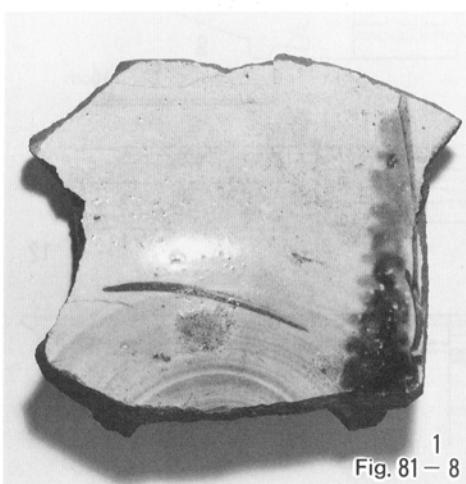


Fig. 80 071号遺構出土遺物

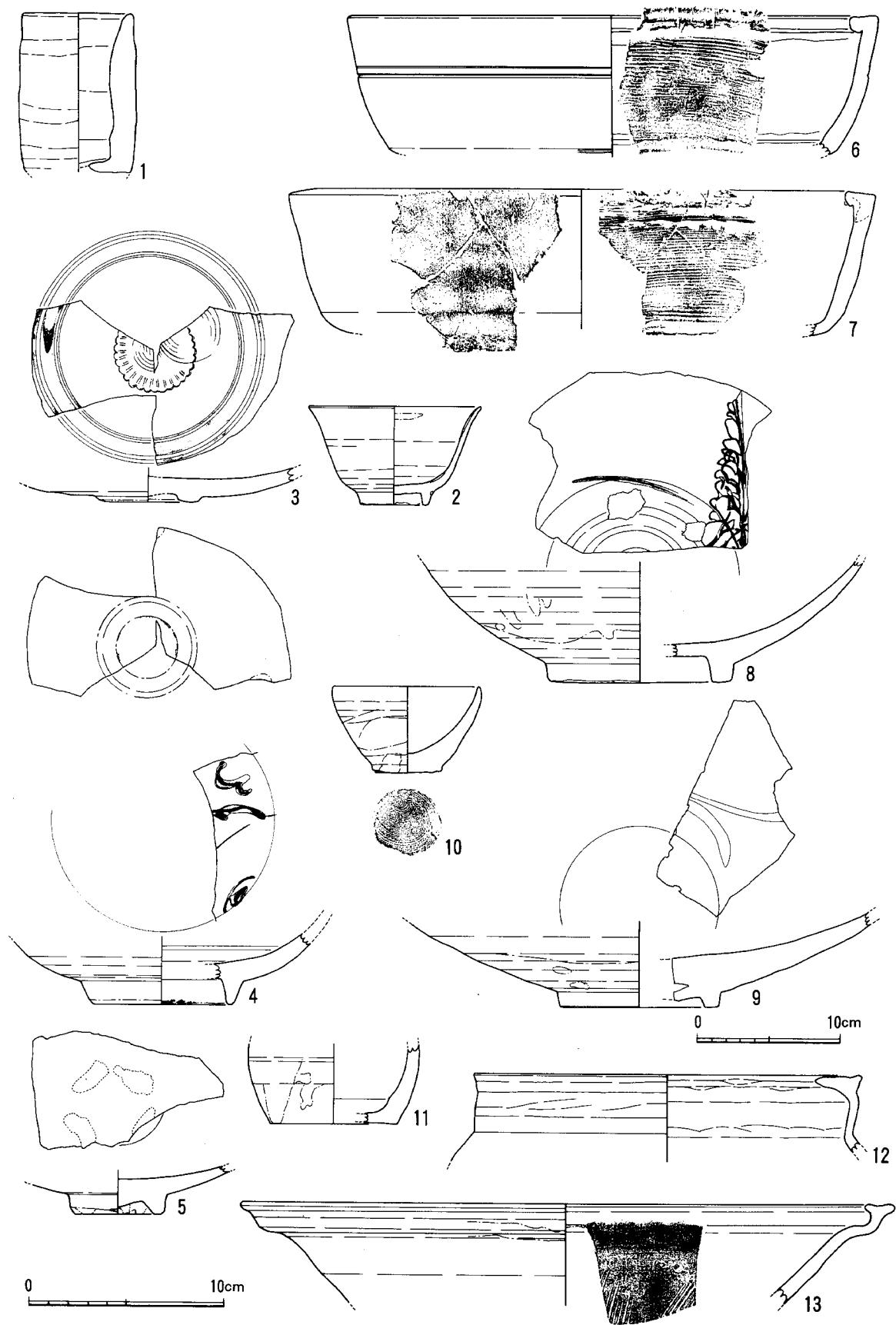


Fig. 81 071号遺構遺物実測図(1/3・6~9…1/4)

に印花文を施す。高台畳付内側には、砂粒が付着する。4は、鉢である。見込みに荒磯文をあしらう。畳付は露胎で、砂が付着している。5・8～13は、肥前陶器(唐津焼)である。5は灰釉をかけた皿で、畳付のやや外側から高台内を露胎とする。見込みと畳付には、それぞれ4ヶ所の砂目がみられる。8は、鉢である。刷毛塗りの白化粧の上に、鉄で幹や枝を、銅で葉を描き、灰色不透明釉をかけたもので、緑と褐色の二彩となる。見込みには、砂目がみられる。体部外面の下位は、露胎となる。9は、大皿である。灰オリーブ色の釉に、鉄絵を描く。体部外面の下半部は、露胎となる。畳付に胎土目がみられる。10は、灰釉の盃である。灰色の胎土に、うすい灰オリーブ色の釉をかける。外底部には、回転糸切り痕がみられる。11は、徳利であろうか。茶褐色釉であるが、なまこになる。12は、褐釉の壺である。体部の内面には、叩き目が認められる。13は、すり鉢である。口縁部にのみ赤茶色の釉をかける。体部内面には、幅が細いすり目が、浅く刻まれる。6・7は、瓦質土器の火舎である。口縁部は、鍵の手に内方に折り返す。内面は横方向の刷毛目調整、外面は平滑に研磨する。6は口径36.7cm、7は40.6cmをはかる。

これらの遺物からみて、17世紀前半代に位置付けることができよう。

8 中・近世の遺物

上記以外にも、多くの遺物が遺構・包含層から出土した。それらの一部を、簡略に紹介する。

Fig. 81-1は、瀬戸・美濃系陶器の菊皿である。体部は、外方からへラで縦に刻みを入れて凹ませ、輪花につくる。須恵質に焼成された灰白色の緻密な胎土に、灰緑色の透明釉を施す。ただし、釉は、体部内面と口縁部外面にかかるだけである。外底部はケズリ、体部および内面は、横ナデ調整する。口径3.4cm、底径2.6cm、器高1.0cmをはかる。A区第2面182号遺構出土。2は、磚である。小片であり、表面を除けば、すべて折損面もしくは剥離面で、旧状をとどめていない。表面には、型押しで草文(秋草文か)を描く。瓦質焼成であるが、焼成はあまく、器表は淡灰色を呈する。A区第3面下包含層出土。3は、白磁の托である。灰色で、きめ細かい胎土に、灰色の半透明釉をかける。底部は円錐状に抉りこみ、露胎である。A区第3面131号遺構出土。4は、瀬戸・美濃系陶器の天目茶碗である。明灰色の粗い胎土に、表面に鉄錆が浮いた柿釉を施す。A区第2面112号遺構出土。5は、中国で作られた天目茶碗である。黒灰色のきめ細かい胎土に、黒色の釉をかける。A区第2面112号遺構から、上述の4と共に出土した。6は、石硯である。縁は、全周で欠け、残らない。海部分には、墨が付着

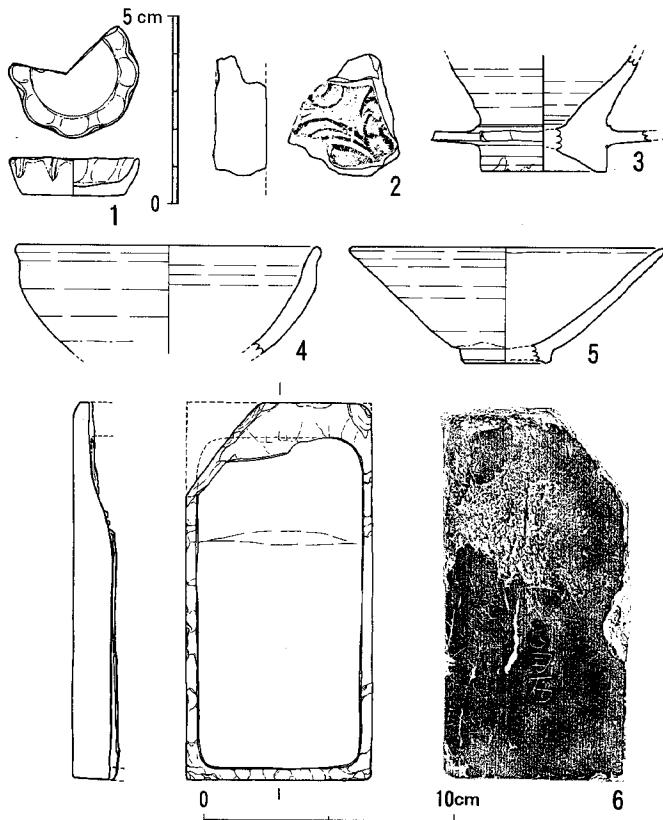


Fig. 82 中・近世の遺物実測図(1/2・1/3)

している。灰黒色に黒斑が散らばった、きめの細かい凝灰岩を用いている。裏面に細く「高田石」と刻む。硯の生産地を示すもので、岡山県真庭郡勝山町で作られたものであることがわかる。長辺14.8cm、短辺7.35cmをかる。A区第1面067号遺構出土。

Fig. 83-1は、越州窯系青磁碗の底部である。見込みと畳付に重ね焼きの目痕が残る。A区第3面227号遺構出土。2・3は、朝鮮王朝の象嵌青磁碗である。2は白土、3は白土と黒土で花文を象嵌している。2はA区第1面下包含層、3はA区第2面191号遺構から出土。4は、朝鮮王朝の灰釉陶器碗である。暗灰色のきめの粗い胎土に、灰色透明釉を施す。A区第1面069号遺構（井戸）掘りかた出土。5は、青磁の馬上壺の脚と思われる。龍泉窯系で、灰白色の胎に、濃緑色の釉をたっぷりと施す。釉調からみて、中国明代のものであろう。6は、施釉陶器の水注であろう。灰白色の須恵質の胎に、灰緑色の透明釉がかけられており、瀬戸・美濃系陶器と思われる。把手の先端は、剣頭状に作る。

Fig. 84-1～7は、墨書磁器である。1は、龍泉窯系青磁碗で「周二」と書く。B区第1面下包含層出土。2は白磁皿である。「周□」と書く。二字目は、文字か花押か不明。1の「周」字と筆跡が類似しており、同一人の手になるものと思われる。A区第2面下包含層出土。3は白磁碗である。「大□」と読める。二字目は金偏のようにみえる。A区第3面221号遺構出土。4は、龍泉窯系青磁碗である。「李」と書かれている。B区第1面下包含層出土。5も龍泉窯系青磁碗である。漢字二文字と思われるが、判然としない。A区第2面136号遺構出土。6は白磁碗である。花押であろうか。B区第3面690号遺構出土。7も白磁碗である。花押が墨書されている。



Fig. 83 中・近世の出土遺物 1

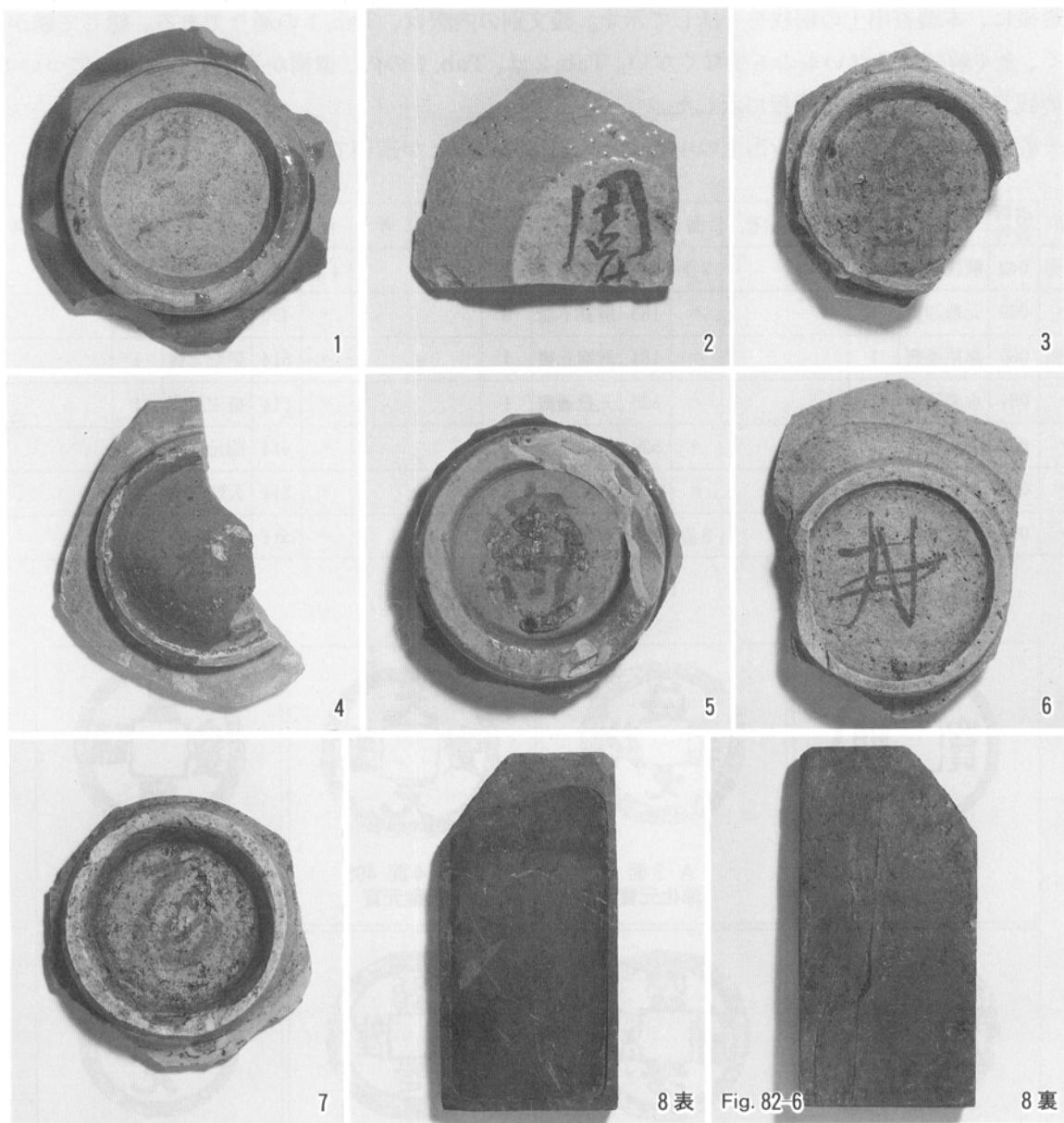


Fig. 84 中・近世の出土遺物 2

錢貨名	初鑄年	時代	枚数	備 考	錢貨名	初鑄年	時代	枚数	備 考
開元通寶	621	唐	3		紹聖元寶	1094	宋	1	
太平通寶	976	宋	1		聖宋元寶	1101	宋	2	
淳化元寶	990	宋	1		政和通寶	1111	宋	1	
天聖元寶	1023	宋	2		至大通寶	1310	元	1	
皇宋通寶	1037	宋	2		洪武通寶	1368	明	1	
嘉祐通寶	1056	宋	1		永樂通寶	1408	明	1	
熙寧元寶	1068	宋	2		解讀不能			13	
元豐通寶	1078	宋	2		合 計			34	

Tab. 1 出土銅錢一覽表

最後に、本調査出土の銅錢を一括して示す。錢文別の内訳は、Tab. 1 の通りである。総じて鋤がひどく、全く解読できないものも少なくない。Tab. 2 は、Tab. 1 の内、遺構から出土したものについて、その錢文別の内訳を各遺構毎に示した。

一般的な傾向ではあるが、出土の中心は北宋錢にあることが指摘できよう。

面	遺構番号	錢貨名	枚数	備考	面	遺構番号	錢貨名	枚数	備考	面	遺構番号	錢貨名	枚数	備考
1面	042	解読不能	1		2面	100	熙寧元寶	1		4面	496	天聖元寶	1	
"	069	元豐通寶	1		"	183	解読不能	3		"	496	開元通寶	1	
2面	080	嘉祐通寶	1		"	184	熙寧元寶	1		"	514	紹聖元寶	1	
"	081	永樂通寶	1		"	526	元豐通寶	1		"	514	皇宋通寶	1	
"	081	開元通寶	1		"	529	解読不能	1		"	514	開元通寶	1	
"	085	至大通寶	1		"	600	解読不能	1		"	514	天聖通寶	1	
"	089	太平通寶	1		3面	260	解読不能	1		"	514	解読不能	1	

Tab. 2 遺構別出土銅錢一覧表

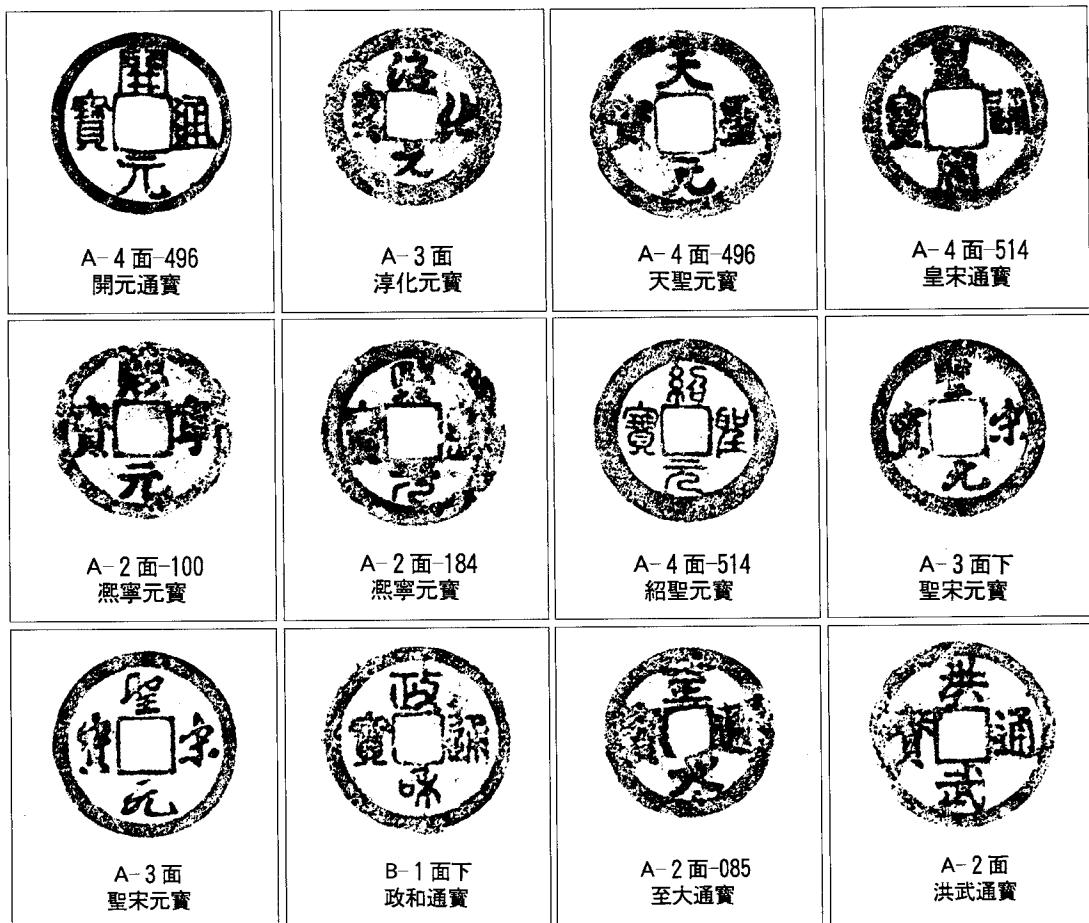


Fig. 85 出土銅錢拓影(1/1)

第三章 ま　と　め

調査成果の総括

1. 本調査では、8世紀から16世紀におよぶ遺構を調査した。
2. 古代の遺構としては、奈良時代から平安時代初めの竪穴住居跡・土坑などを検出した。この時期の遺物としては、須恵器の円面硯の脚部が出土したことが注目される。
3. 平安時代の遺構としては、土坑・井戸などは検出できず明かな遺構は見あたらない。しかし、越州窯青磁や緑釉陶器の出土など、むしろ一般集落に優越する内容が看取でき、遺構がないとは考えがたい。おそらく、時期の限定しがたい柱穴の中にこの時期のものが含まれていると思われ、掘立柱建物跡を中心とした遺構が、営まれていたと考えたい。
4. 平安時代末、11世紀後半から急激に遺構・遺物が充実しはじめる。土坑・井戸・柱穴などがみられる。
5. 中世の遺構としては、土坑・井戸・溝・柱穴などがある。五輪塔や板碑を転用した遺構がある。

古代の遺構・遺物について

8世紀後半から9世紀初め頃の竪穴住居跡に関しては、本文中でも述べたが、埋土である灰色～灰茶色の砂が、地山の砂丘砂と区別しにくく、プランの検出が困難であった。また、同じ理由から床面の確認にも苦労し、大体において掘りすぎたきらいがある。今後の反省としたい。

この時期の遺物にみられる特徴として、須恵器の質がやたらと良いことをあげておかねばならない。実測図には表現できないことだし、言葉で「胎土が緻密で、精良」と言っても言い足りないほどに質が良い。たとえるならば、「現代の常滑焼きの朱泥の急須を割ったような土の感じ」と言うことになろうか。とにかくきめが細かく、緻密なのである。さらに、この類は焼成も良く、焼きしまったものも見られる。第77次調査出土の須恵器のすべてがそうだと言うわけでもないが、通例の発掘調査ではお目にかかる質の良さであり、特筆すべき点であろう。これらの須恵器が、規模の小さ目な、どちらかと言えば貧弱な感のある、本調査地点の竪穴住居跡にともなったものとは考えがたい。推測の域を出ないので、竪穴住居跡がこの時期の遺構の主役なのではなく、掘立柱建物跡の方に中心的な施設があったのではなかろうか。本調査地点の範囲内では、B区第3面に1棟だけ古代の大型の掘型を持つ掘立柱建物跡がかかっている。おそらく、掘立柱建物跡は、本調査地点の東側に展開していたのであろう。第77次調査地点は、それら掘立柱建物跡群の外縁に営まれた、従属的な竪穴住居跡群であったと考えたい。竪穴住居跡の規模が小さ目なのも、そのためではなかろうか。

古代末から中世初頭の状況

本調査地点では、11世紀後半の遺構が多く検出されている。博多遺跡群では、一般的な特徴として、11世紀後半から遺構・遺物の量が急激に増加することが指摘されている。しかし、11世紀後半に限ってみれば、確かに前代までに比べれば圧倒的に増えているものの、そうやたらと多いとは言えないのが現状ではなかろうか。それに比べれば、本調査地点での11世紀後半の遺構の検出率は高いということができる。

本調査地点の西に近接する第14次調査地点では、最下層に堆積した泥土層から、白磁の集積が出土した。これは調査担当者によって、船からの荷揚げに際して、それまでに破損した積み荷を一括して

波打ち際に投棄したものと推定された（池崎・森本1988）。この白磁の一群は、12世紀前半の遺物とされており、当時第14次調査地点付近に港があったと言うことになる。

また、本調査地点の1軒において南の第56次調査では、土坑の底に箱詰めした大量の白磁碗を埋め込んだ11世紀後半の遺構が発見された。報告者は、商品出荷に際して、厳格な選別が行われた結果だとする（浜石・菅波1993）。

さらに、第56次調査地点と本調査地点からは、11世紀前半の沈線で花文を描く越州窯青磁がまとまって出土していることにも注意しなくてはならない。博多遺跡群は、大体において越州窯青磁の出土量が多い遺跡ではあるが、花文を描くものの出土点数はそう多くはない。それが、当時の海岸線に沿った両調査地点に集まっているのである。11世紀前半は、鴻臚館遺跡での最末期であるとともに、博多に宋人の往来が知られ始める時期もある。すなわち、鴻臚館貿易から、博多での住蕃貿易へと転換した時期なのである。

第14次調査地点での港の推定、第56次調査地点・本調査地点での11世紀前半の越州窯青磁の優勢、本調査地点での11世紀後半の遺構の密度、第56次調査地点での白磁の選別、そして12世紀前半になると博多浜全体に遺構が高密度で展開し、12世紀後半には砂丘間の低湿地を埋め立てて息浜まで遺構が拡大していくことを考え合わせれば、次のような推測が可能になろう。すなわち、11世紀代、住蕃貿易開始期においては、港に沿って、宋商人らの家がたてられ、そこで商品の貯蔵・管理、選別・出荷が行われていた。それは、住蕃貿易の隆盛とともに12世紀前半にはすでに博多浜全域に拡大し、やがて、低湿地をはさんで海側に隔絶されていた息浜にまで開発が及んでいった。

こう考えたとき、興味深いのは、博多浜の東縁に広大な寺地を誇る聖福寺に伝わる、開山栄西の言上状である。後世の偽作とされるこの文書は、しかしその内容の具体性からある程度の真実なり伝承を反映したものとして、用いられることが多い。それによれば、聖福寺の寺地は宋人らが百堂を営んだ跡であり、百堂が崩れさった跡も「仏地」であったが故に空き地のまま放置されていたと言う。この百堂については、亀井明徳氏によって墓地に付随した墳墓堂であったと推測されている（亀井1986）。上にみたような急速な都市拡大の中でも空き地のままに残されていたとすれば、百堂の地が宋人らの墓所であった可能性は高いと思われる。栄西の入宋に関わってその名が見える張国安ら博多綱首によって聖福寺の造営が支援されたとすれば、その寺地となった百堂の故地もかれら宋人たちによって管理されていたものと考えられるのではなかろうか。

ところで、13世紀初め頃の聖福寺建立の時期からみて、すでに朽ちて空き地となっていた百堂が営まれたのは、いつのことであったのか。博多に宋人の存在が知られるようになる11世紀前半を遡らないとすれば、11世紀代、遅くとも12世紀前半までの間であろう。これと先に推測したこととを考え合わせれば、博多に宋人の活動が活発になった11世紀頃、博多浜の西部の港付近に生活、商業の拠点ができる、これと正反対の博多浜東縁に墓所が営まれたことになる。この墓所を放棄させたのは、都市の拡大にほかならない。生活域の拡大にともなって、墓所は博多浜から追い出され、百堂の地は、開発の手がつけられない「仏地」として、それにふさわしい利用の機を待っていたのである。

この他、調査地点の南西に近接して、鎌倉時代末期に建立され近代まで存在した大乗寺との関連、第56次調査で指摘されている中世後半期の南北方向の地割についてなど、ふれなくてはならない課題は多い。しかし、残念ながら紙数がつきました。これについては、また別の機会を期したい。

池崎譲二・森本朝子 1988 「博多出土北宋後半期の貿易陶磁」 日本貿易陶磁研究会『貿易陶磁研究』 No.8

浜石哲也・菅波正人 1993 『博多34』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第326集 福岡市教育委員会

亀井明徳 1986 『日本貿易陶磁史の研究』 同朋社

博多 45
博多遺跡群第77次調査の概要

福岡市埋蔵文化財調査報告書第394集

1995年（平成7年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
印刷 株式会社 川島弘文社
